

宮城県一迫町文化財調査報告書 第4集

# 宝 領 遺 跡

昭和 59 年 3 月

一迫町教育委員会

宮城県一迫町文化財調査報告書 第4集

# 宝 領 遺 跡

昭和59年3月

一迫町教育委員会

## 序

一迫町内の道路整備事業の一環として、川北線の拡幅工事が計画され、その施行に当って、宝領遺跡の一部が破壊される事になったため、記録保存の為の緊急発掘調査を実施いたしました。

宝領遺跡は、一迫川に面し、古くから縄文時代の土器、石器が出土する周知の遺跡でした。又、附近には巻堀遺跡、青木畠遺跡があり、下流には国史跡として著名な山王塚遺跡があります。

調査の結果、縄文前期、後期、平安時代に涉る複合遺跡である事が判明しました。又、縄文後期前葉の土器は、従来明確でなかった宮城県北西部の同時期の様相を知る上で貴重な資料が得られました。

ここに調査の成果を報告するにあたり、調査の御指導をいただいた宮城県教育庁文化財保護課、調査員の諸先生方、特に川口地区の遺跡の保護、本遺跡の発掘についても御尽力いただいた故 三塚信一氏、発掘調査及び、本書の刊行を担当された佐藤信行氏に対して、深く感謝を申し上げます。

最後に、この報告書が研究者の方々及び、一般の方々に御活用いただければ幸いと存じます。

昭和59年3月

一迫町教育委員会

教育長 佐 藤 英 夫

## 例　　言

1. 本書は、町道川北線の拡幅工事に伴う、緊急発掘調査報告書である。
2. 本書に掲載した遺物の内、図版21は、故三塚信一氏の採集されたものである。故三塚氏所蔵遺物は、現在、一括して一迫町に寄贈されている。又、本調査に際しても、多大の御高配を頂いている。亡くなられた三塚氏に対し、衷心より哀悼の意を表する。
3. 遺物の整理、本書の執筆に際して、次の方々に御協力をいただいた。

遺物の洗浄、接合、ネーミングの大半	佐々木尚見
石器、土器片利用円盤の実測、トレース	三宅 宗議
石器の写真撮影の一部	三宅 宗議・藤原二郎
4. 本書の執筆、編集に際して、次の方々に御指導、御協力をいただいた。

後藤 勝彦	宮城県石巻女子高等学校教頭
三宅 宗議	宮城県石巻高等学校教諭
藤沼 邦彦	宮城県教育庁文化財保護課調査第二係長
佐々木 孝	仙台市科学館指導主事
阿部 正光	瀬峰町教育委員会社会教育主事
5. 本書に於いて、土色、遺物の色調等については、小山、竹原：1967「新版標準土色帳」を参照した。
6. 本書の第1図は、国土地理院発行、5万分の1地形図「岩ヶ崎」の一部を使用し、複製したものである。
7. 担当者の不手際により、石器類のうち、剝片石器については、その一部しか掲載できなかった。従って、宝鏡遺跡出土石器群の全容を示すものではない。
8. 本調査に関して、既に概報を公表しているが、本書がそれらに優先するものである。
9. 本書の執筆、編集は、担当者の佐藤信行が行った。
10. 出土遺物は、報告書作成後、一括して一迫町教育委員会で保管している。

# 目 次

## 序

## 例 言

## 調査要項

I. 遺跡の位置と環境 .....	1
1. 地理的環境 .....	1
2. 考古学的環境 .....	1
II. 調査の方法と経過 .....	7
1. 調査方法 .....	7
2. 発掘経過 .....	7
3. 調査後の経過 .....	8
III. 発見された遺構と遺物 .....	9
1. 基本層位 .....	9
2. 遺物の出土状況 .....	11
3. 遺構 .....	12
4. 出土遺物 .....	14
IV. 縄文後期土器について .....	57
1. 出土土器の類別 .....	57
2. 類別土器と各遺跡出土土器との対比 .....	59
3. 宝鏡遺跡の地域性 .....	61
4. いわゆる南境式土器との関係 .....	65
V. 故 三塚氏採集遺物 .....	67
VI. まとめ .....	69
<b>図 版</b>	
1. 遺跡遠景、発掘前の状況 .....	73
2. 発掘状況 .....	74
3. 発掘状況、遺物出土状況 .....	75
4. 遺物出土状況 .....	76
5. 土 埋 .....	77
6. 集石を作う溝(近~現代) .....	78
7. 縄文前期土器他 .....	79
8. 縄文後期第一土器 .....	80
9. 縄文後期第一土器 .....	81
10. 縄文後期第一土器 .....	82
11. 縄文後期第一土器 .....	83
12. 縄文後期第二土器 .....	84
13. 縄文後期第二土器 .....	85
14. 縄文後期第二土器 .....	86
15. 縄文後期第二土器他 .....	87
16. 土器片利用円盤 .....	88
17. 刺片石器 I .....	89
18. 刺片石器 II .....	90
19. 円盤状石器、磨製石斧他 .....	91
20. 凹石、石皿他 .....	92
21. 故 三塚氏採集土器 .....	93

## 調査要項

役、職名は調査當時

- 〔遺跡名〕 宝領遺跡
- 〔所在地〕 宮城県栗原郡一迫町川口宝領44、竹ノ花36他
- 〔調査期間〕 昭和52年5月17日～5月24日、延8日間
- 〔調査主体〕 一迫町教育委員会
- 〔調査指導〕 宮城県教育庁文化財保護課：高橋多吉、平沢英次郎、小井川和夫、高橋守克  
方賀寿幸
- 〔調査担当者〕 佐藤 信行：日本考古学会員
- 〔調査員〕 二塚 信一：一迫町文化財保護審議委員  
狩野 義章：花山村文化財保護委員  
佐々木尚見：瀬峰町文化財保護委員  
小野 昭光：一迫町社会教育指導員
- 〔調査協力者〕 金野 正：宮城県染館女子高等学校教諭  
大滝 武尚：一迫町土木課  
大槻己代治
- 〔調査参加者〕 大槻己代治、千葉正志、細川泰治、高橋春男、安倍秀雄、加藤清人、  
中鉢常雄、米山みいき、齊藤あや子、高橋さつ子、千葉英子
- 〔事務局〕 菅原 功：一迫町教育委員会教育課長  
菅原 金昌：一迫町教育委員会教育課長補佐  
菅原 文悦：一迫町教育委員会派遣社教主事

## I. 遺跡の位置と環境

### 1. 地理的環境

宝領遺跡は、宮城県栗原郡一迫町字川口宝領に所在し、一迫町役場より北西、約5kmの位置にある。一迫町は、宮城県北部の、栗原郡に属し、そのほぼ中央に位置する。

一迫町は、奥羽山地から派生した陸前丘陵から、荒雄川（江合川）を境に分岐した、築館丘陵に属する。この築館丘陵は、一迫町に入りて一迫川、長崎川等によって開拓され、川口、長崎地区では、段丘、自然堤防等を発達させ、その下流では沖積平野が形成される。

宝領遺跡は、一迫川北岸の河岸段丘上に立地する。遺跡附近の標高は、約70mで比較的、平坦である。遺跡前面の、一迫川河床との比高は約12~13mで、河床面と遺跡面との間に、もう一面が介在し、その面と遺跡面の比高は、約7mである。遺跡周辺の後背には、標高200m前後の、築館丘陵の支丘陵が東西に延びている。一迫川は、現在、宝領遺跡の南約0.2kmの地点を流れているが、春堀遺跡と本遺跡との間に、細長い低地が東西に走り、これが、旧河道であろうとされている。とすれば、縄文時代に於ける宝領遺跡の自然景観は、前面に一迫川を足下にし、後背に丘陵を控えた、テラス状の平坦で細長い車状の台地（段丘）であった事が想像される。発掘地点は、段丘先端部にあたるため、眺望がすこぶる良く、川口地区はもとより、真坂方面まで一望する事ができる。

遺跡の規模は、東西約100m、南北約100mの範囲で、その中心はBトレンチの北側部分であったと思われる。<sup>註1</sup>

### 2. 考古学的環境

一迫町内の遺跡として、現在、55ヶ所の遺跡が登録されている（県教委：1981）。しかし、故三塚信一氏、佐藤等の踏査によって、その実数は更に増加している。

一迫町内の遺跡分布は、総じて一迫川上流の川口地区と、長崎川上流の長崎、大川口地区に密で、両河川下流の真坂地区、及び以東では少い。このような傾向は、縄文時代、弥生時代には特に顕著で、奈良～平安時代になると、その傾向は逆転する。

#### 旧石器時代

一迫町史に、佐野原遺跡出土とされる大形の局部磨製石斧が、旧石器時代末期に属する公算が強いとして紹介されている。それ以外に、町内で旧石器時代の遺跡、遺物は発見されていない。但し、隣村、花山村草木沢吉坂遺跡で有舌尖頭器、同村大穴山遺跡で細石刃核、石刃に類似する資料が得られており、又、花山村から一迫町西部にかけて、地点によっては厚さ5mに



第1図 宝領遺跡の位地と周辺の遺跡 (国土地理院発行 1/50,000「岩ヶ崎」を基盤)

第1表 遺跡地名表

No.	遺跡名	立地	時 代	No.	遺跡名	立地	時 代
1	45009 宮 墓	御井段谷(縄文初期、後期、平安時代(後の近世跡を含む))	76	45007 貴 村	高麗 丘	甲	平安～中世
2	古墳 2	同上段谷、御井寺周	27		大 下	自然地形	平安時代
3	45035 唐 墓	自然地形、礫文後期、神代、弥生中期、平安時代	28	45032 吉 木	自然地形	縄文後期、弥生中期	
4	野 古 墓	自然地形、縄文中期、後期	29	45032 向 地	自然地形	縄文中期	
5	龜 山	山丘、自然地形、縄文後期、平安時代	30	45050 月	自然地形	縄文後期	
6	山越櫛 六	山越櫛町、春良～平安時代(飛瓦、竹ノ丸)	31	45032 清木野村	丘	山	
7	山野櫛町	丘	山	31.2	同上	丘	山
8	門田櫛町	丘	山	32	45028 桃 丘	丘	山(山林跡)
9	45046 上 ハ	山林跡、縄文中期、平安時代	33	45014 日 丘	丘	山	縄文中期
10	原 丘	自然地形、縄文中期	34	稻 丘	丘	山	縄文中期、後期
11	45034 川 口	丘	山	35	45015 犬 丘	丘	山
12	45051 山 ノ	山丘、山林、通史早削、石碑、防生塗跡	36	45049 木 丘	丘	山	縄文中期
13	一丁屋敷	丘	山	37	松 木 丘	丘	山
14	大 木 木	丘	山	38	45029 大木田原	丘	山
15	道 野 里	丘	山	39	45030 高 木 丘	丘	山
16	45048 丁 木 木	丘	山	40	45013 亂 木 丘	丘	山(山林、小山丘跡)
17	45048 二 木 木	丘	山	41	45003 猪 丘	丘	山
18	45048 三 木 木	丘	山	42	45016 西 木 丘	丘	山
19	45030 清 木 木	丘	山	43	45016 西 木 丘	丘	山
20	猪 木 木	丘	山	44	火 木 丘	丘	山
21	45030 清 木 木	丘	山	45	47012 猪 木 丘	丘	山
22	猪 木 木	丘	山	46	47005 狩 木 丘	丘	山
23	赤 壁	赤壁(岩)、海芋中期	47	47007 月 (イモ)	丘	山	縄文中期～後期初期
24	大 岩 1	丘陵(岩)、海芋中期～後期初期	48	角 丘	丘	山	縄文時代
25.1	大 岩 2	丘陵(岩)、海芋中期、神代	49	47004 長 木	丘	山	縄文中期～中期
	25.2	縄文中期、中期	50	丘 木 B	丘	山	縄文時代

も及ぶローム層が発達している等、条件的には、本地域に於いても近い将来、旧石器時代の様相が明らかにされる公算は大きい。

### 縄文時代

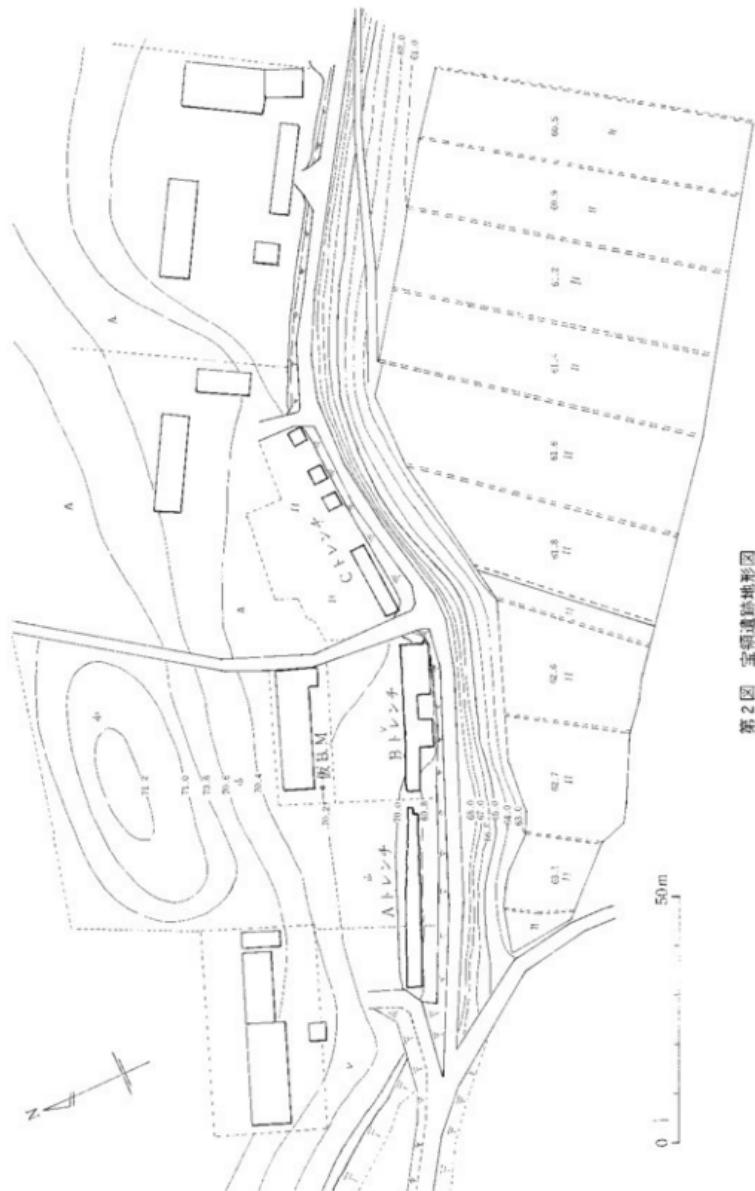
縄文時代の遺跡は、町内全域に分布するが、前述したように奥羽山地寄りの川口、長崎地区に集中し、真坂、柳ノ目、姫松地区には疎である。

早期の遺跡には、長崎の上人栗、赤坂、川口の清水田、山ノ神遺跡等がある。いずれも、丘陵端部又は斜面に立地し、出土遺物も少い。三平屋敷、大崩1号墓遺跡では、早期末から前期初頭にかけての遺物が発見されており、特に三平屋敷遺跡では、川口から細倉に至る県道のカッティング面に、5～6mの落込みが確認されており、住居跡の可能性が強い。

前期前半の遺跡として、大栗、清水田、山ノ神遺跡等がある。大栗遺跡は、大木2a式を主体とする、かなり大規模な遺跡である。前期後半の遺跡には、千代子沢、姥沢、鍛冶屋、大賀湯遺跡等がある。花山村大穴山、原井田両遺跡は、いずれも一迫町に近接しており、現在の行政域を越えて、これらは当時の「ムラ」を形成していたものと思われる。

中期前半の遺跡は少く、大栗、大賀湯、猿田原遺跡等から僅かに土器片が発見されているにすぎない。中期後半の遺跡には、猿田原、小古、日向、沖、竹ノ花、染場、鍛冶屋B遺跡等がある。この時期になると、遺跡数の増加もさることながら、遺跡の規模、内容ともに、前代に

第2図 宝鏡遺跡地形図



比較すると飛躍的に増大する。その傾向は後期前葉まで持続するが、中葉以降になると遺跡数が極端に減少し、末葉の遺跡は未確認である。

後期前半の遺跡には、青木畠、小古、猿田原遺跡、中葉の宝ヶ峰式は、清水田、井戸沢遺跡で少しづつ発見されているにすぎない。

晩期になると、遺跡の立地が、それ以前の丘陵又は自然堤防上であったものから、ほとんど自然堤防に変わる。前半の遺跡は、上戸、巻堀、上ノ原C、高田遺跡、中葉から後半にかけての遺跡には、山王、巻堀、上戸、室ノ沢、青荷2、河童淵遺跡等がある。この内、山王遺跡は昭和39年～40年にかけて、数次の調査が実施された。特に、縄文晩期後半から弥生時代初頭にかけて、連続的に移行する様態が明確にされ、藍胎漆器、編布等の出土とともに併せ、全国的に著名な遺跡となった（伊東：1970）。巻堀遺跡も、昭和50年に発掘調査が実施され、晩期中葉から末葉にかけての多種の遺物が大量に出土した。巻堀遺跡では、地点が限定されたトレンド堀りのため、住居跡等の遺構は発見されなかった（県教委：1977）。山王遺跡でも、炉跡は発見されたが、明確な姿での住居跡は発見されていない。しかし、両遺跡ともに、遺跡のひろがり、多種、大量の遺物の出土等から見て、かなり大規模な集落跡であった可能性が強い。

### 弥生時代

弥生時代の遺跡は、その初期のものと、後半期のものに大きく片寄り、中期の時期のものは極端に少い。

初期の遺跡としては、山上、青木畠、河童淵、室ノ沢、松西風、大栗の各遺跡が知られている。そのほとんどは、縄文晩期後半から連続して営れた遺跡であるが、松西風、青木畠遺跡はこの時期の、ほぼ単純遺跡である。山王、青木畠遺跡（加藤：1982）は、ともに発掘調査が行われ、多量の出土遺物をもとに、「山王Ⅱ層式」（須藤：1973）、「青木畠式」（佐藤：1981、須藤：1983）と命名され、北上川流域に於ける弥生時代初頭の七器の基準資料となった。

東北地方の後期弥生を代表する、いわゆる天王山式上器は、上ノ原A、B、C、山ノ神、佐野原、龜山、大栗、猪込等の各遺跡から出土しているが、上ノ原、山ノ神遺跡を除いては、いずれの遺跡でも微量な土器片の出土に留まっている。上ノ原A遺跡では、昭和51年の発掘調査によって、一辺、4m前後の馬蹄形を呈する豊穴住居跡1棟が検出され、土器、石器等の一括資料が得られた。（佐藤他：1978）、又、山ノ神遺跡から採集された土器群は、天王山遺跡出土の天王山式上器と異なり、天王山式に後続し、又は系統を異にするタイプを含んでいる事が指摘されており（廣野：1976）、上記の諸遺跡が、時間的、系統的にも一様ではない事を示唆している。

弥生時代初期の遺跡は、山王遺跡に代表されるように、河川中流域の自然堤防上に立地する場合が多く、一方、後期の天王山式（系）の遺跡は、河川上流域の丘陵尾根上に立置する場合

が圧倒的に多い。

### 古墳時代

古墳時代の遺跡は、極めて少い。狩野コレクション中に、真坂祇園出土とされる2点の完形土器があり、形態、調整技法等の特徴から見て、中期の南小泉式に比定される。又、真坂鶴町遺跡から出土した土器の中に、栗圓式～國分寺下層式のものが含まれており、古墳時代後期から奈良時代にまたがる時期と見られる。

古墳時代を象徴する遺構として、古墳（高塚、横穴）がある。町内には、高塚古墳として八幡原古墳群がある。横穴古墳は、一迫川中流域に数群、分布する。上流から竹ノ花（山館）、保呂<sup>ほろ</sup>羽山、鹿島館、西沢の各支群が知られている。最も大規模な、竹ノ花支群は、40数基あるが、他は10基未満によって構成されている。これら、町内に分布する古墳の年代については、発掘調査された例もなく、年代を決定できる出土遺物も少ないので明確ではない。但し、横穴古墳について言えば、横穴の形態は末期的な様相を呈しており、佐藤が鹿島館横穴古墳群の直下で採集した須恵器が、8世紀末頃の高台付环である点等から見て、（金野、佐藤：1976）奈良時代後半から平安時代初頭に涉る可能性が強い。

### 奈良～平安時代

奈良～平安時代の遺跡は、川口地区では清水田、巻堀、上戸、的場、大下遺跡等が知られている。それより東部では、十文字～十日市にかけて、或は、曾根～鶴巻にかけて各所から土師器、須恵器が出土している。又、竪穴住居跡の存在も確認できたという。

尚、清水田遺跡から出土した土師器环に、「神」と墨書きされた文字が確認された。この土師器は、平安時代前半～9世紀に比定され、一迫町内では、最古の文字資料となっている。<sup>注3</sup>

#### 註

- 1) 地権者の大槻氏の教示によると、BトレンチとCトレンチの中間の農道を拡幅した際、多量の遺物が出土したという。
- 2) 鹿島館支群の一部が、昭和6年、喜田貞吉博士によって調査され、切子玉、歯手刀等が出土したという。又、竹の花支群から铁刀片が出土したと言う。
- 3) 三宅宗謙氏によって、「館報いちはきま」に詳しく紹介されている。

## II. 調査の方法と経過

### 1. 調査方法

今回の調査は、道路に沿った、巾4~7m、長さ約100mの細長い、約500m<sup>2</sup>の地域を対象として行った。発掘区は、道路に平行して巾3mのトレンチを設定し、更に3m毎に区切って、3m四方のグリッドを設定した。当初、トレンチは、一括して取扱ったが、調査の進展に伴いA、B、Cの各トレンチに区分した。すなわち、発掘区の西端から、浅い谷の入る部分までをA、そこから農道によって分断されるまでをB、農道から、発掘区東端までをCの各トレンチと呼称する事とした。更に、Bトレンチの南側に平行して、部分的に6グリッドを設定し、グリッド数字にダッシュを冠してB11'グリッド等と呼称する。実発掘面積は、35グリッド、約105m<sup>2</sup>である。

発掘区は、全体的に擾乱が著しく、検出された遺構も土塙1、集石を伴う現、近代の溝1のみであるので、造り方を設定せず、一迫町建設課で作成した工事用の図面を使用し、その際、使用した原点を仮原点とし、そこからレベルを移動して層序、遺構の実測を行った。

遺物の取り揚げは、各グリッド、層位毎に行い、特に遺物が集中して出土したB10、11、11'グリッドでは、まとまりのある土器等についてはブロック毎に取り揚げた。Bトレンチ10、11グリッドで検出された集石を伴う溝状遺構は、後述する理由から近~現代の構築物と認定されたので、日程の都合もあり、遺構の実測を割合し、遺物の取り揚げも各グリッド1層出土土器として取り扱った。

実測図は、層序を $\frac{1}{20}$ 、遺構を $\frac{1}{10}$ で作成し、発掘区周辺の地形図は、一迫町建設課により $\frac{1}{200}$ で作成した。

### 2. 発掘経過

5月17日 現道路の北側に沿って、巾3mの細長い調査区を設定。西からA、B、Cトレンチとする。Aトレンチは表土が薄く、すぐ地山となるため、本日で掘掲完了。

5月18日 Bトレンチの表土剥ぎ。10、11グリッドにかけて、遺物がまとまって出土はじめる。Bトレンチの南側に接続して、もう一本トレンチを設定する。B5'グリッドにまたがって、土塙1基が検出される。

5月19日 Cトレンチの崖掘開始。数年前、開田化されているため、地層の擾乱が著しく、遺物の出土も少い。午後から、県文化財保護課の高橋係長等が来跡。

5月20日 午前中、県文化財保護課の小井川、高橋技師来跡し現地指導をいただく。B

トレンチで検出された集石を伴う溝の形成時期の検討。B10'、11'グリッドで遺物包含層の一部が検出される。

5月21日 B、B'トレンチの精査。

5月22日 B10'、11'グリッド下層の精査。本日より、各地区のセクション図作成に入る。

5月23日 各トレンチのセクション図作成及び畦の取りはずし作業。土壌の精査及び図面取り。午後5時30分、土壌の図面取りの一部を残し、一応作業終了。

5月24日 午後から佐藤と菅原館長で、昨日取り残した土壌の図面作成。

6月23日 Cトレンチの東側、細川氏宅前の地区については、大木の根が無数に存在する事と、遺構、遺物の存在の可能性の薄い点から、立合調査の申し合わせをしていたが、本日、重機による根の抜去作業が行われたが、遺構及び遺物は、全く検出されなかった。これをもつて、最終的に宝瓶道路の緊急調査を終了した。

### 3. 調査後の経過

出土遺物の整理は、洗浄、ネーミング、接合を佐藤と調査員の作業が、各自を自宅で夫々分担して行い、後、佐藤が全体的に見直し、再整理を行った。

上器は、復原資料及び大型破片、底部については実測図を作成し、他の、口縁部破片や特徴のある胸部破片については、その大部分を採択した。

石器及び土器片利用円盤の実測図、トレースについては、その大部分を三宅宗議氏に依頼した。但し、剝片石器については、担当者の不手際によりその一部しか掲載できなかった。

尚、出土遺物は、報告書作成後、一括して一迫町教育委員会で保管しているが、その一部は一迫町農村改善センターで陳列してある。

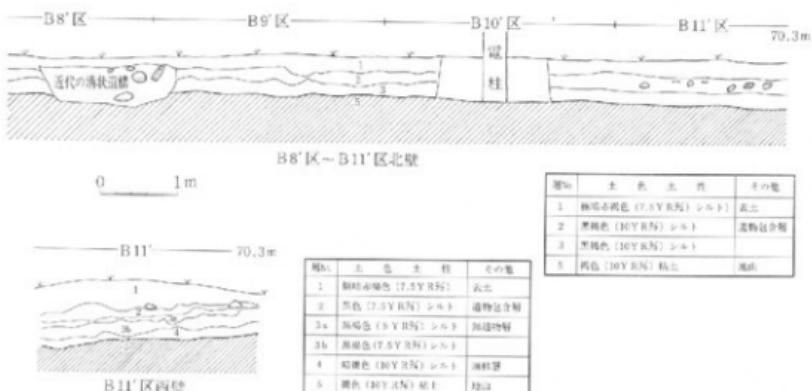
### III. 発見された遺構と遺物

#### 1. 基本層位

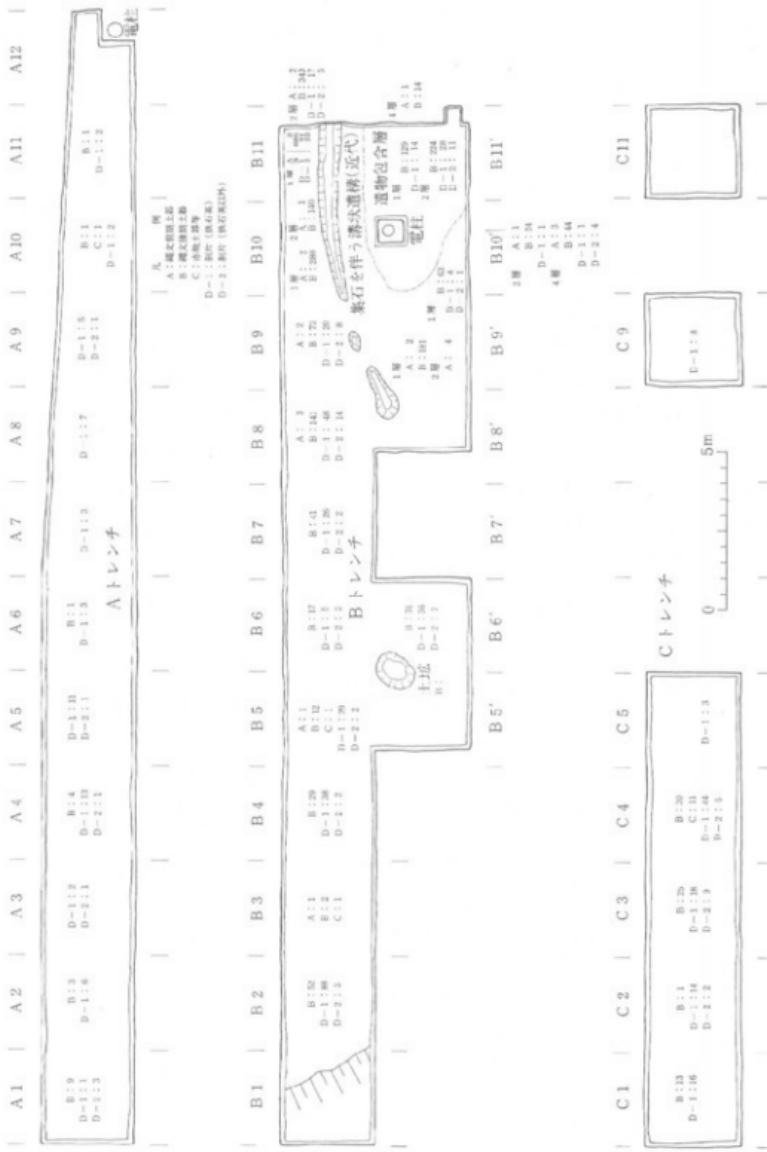
前述したように、調査地点は、全体的に擾乱が著しい。又、Aトレンチは、堆積土が薄く、すぐ段丘疊層となり、Cトレンチは、最近の開田化によって、ローム層まで擾乱が及んでいる。ここでは、比較的擾乱の不顕著な、B11'グリッド西壁及びB8'～B11'グリッド北壁によつて、基本層位を説明する。

**第1層** 極端赤褐色を呈するシルト層。しまりがなく、ボサボサした感じがする。現、近代の陶器、ガラス瓶、ビニールフィルム、繩文土器、平安時代の土器、石器等を包含する。層厚は15～40cm、平均20cm前後で、ほぼ水平に堆積している。B10、11グリッドにかけて検出された溝状遺構は、本層から堀り込まれている。現表土、耕作土。

**第2層** 黒褐色を呈するシルト層。第1層よりしまりがあり、炭化物小片を少量含む。本層は、11'グリッド西壁では南東方向にかけて発達しているが、それ以外のグリッドでは、比較的水平に堆積している。層厚は10～20cm。人頭大～拳大の河原石と、土器、石器等の遺物類も復原土器、一括土器を含めて多量に包含される。遺物包含層。



第3図 Bトレンチセクション図



第4図 調査区と遺構配置図、およびグリッド別遺物出土点数

**第3層** 黒褐色を呈するシルト層。細いロームを斑状に含む。第2層より、更に堅い。本層は、ほとんど遺物を含まない層—3a層と、縄文前期末と後期初頭の遺物を僅かに包含する層—3b層に区分できる。層厚は15cm前後で、東西方向にはほぼ水平に、南北方向にかけては、やや傾斜して堆積している。

**第4層** 暗褐色を呈するシルト層。層厚は5~15cm、無遺物層でローム層との漸積層。

**第5層** 褐色を呈するローム層。但し、第5層が形成されるのは、Bトレンチ8グリッド以東の地区で、それより以西の地区では、第1層→第2層（擾乱が顯著で、第1層との区別が困難な地区が多い）→段丘疊層（B11グリッドでは第5層の下部に堆積）となる。

## 2. 遺物の出土状況

**〔Aトレンチ〕** 本トレンチでは、表土10~20cmで以下は段丘疊層となるなど、B、Cトレンチと堆積土の状況が異なる。その為に、遺物の出土も散発的である。土器は、縄文後期初頭のものが大半のグリッドから出土したが、いずれも細片である。10グリッドから須恵器が1片、1~4グリッドを中心に、石鏃、不定形石器等が7点出土し、他に剝片が60点ほど得られている。

**〔Bトレンチ〕** 2~7グリッドまでは、遺物の出土量は少い。2グリッドで、鉄石英の剝片がかなり集中的に出土した点が注目される。8~11、9'~11'グリッドからは、本調査出土遺物のうち、約半数が得られている。量的に、土器が最も多く出土したのは10、11グリッドであるが、両グリッド出土土器は小破片が多く、接合できたものは少い。一方、11'グリッドでは、比較的大形の破片がまとまって出土した。本グリッドの土器出土状況を詳細に記述すると、第2層中から多量の人頭大~コブシ大の河原石が検出された。この河原石群は、人為的に配列構築された痕跡は認められなかった。土器類の遺存状態は、比較的良好で、接合できる破片が多く、完形又は半完形に復元できた土器は、すべて、本グリッド出土である。河原石群と土器類の関係は、両者が第2層下部において、ほぼ、同一レベルで検出された。この河原石群と、遺物類の成因については、遺構や特別な出土状態を示さない事から、単に遺物包含層としておく。尚、この遺物包含層は10'、11グリッドの一部にも延びている。恐らく、10'~11グリッドから多量の遺物が出土し、しかも、河原石群とともに、後世の溝上に多量に積み上げられている点等から、元来、この両グリッドも、11'グリッドに連続する遺物包含層であったものが、後世の溝構築に際して破壊され、その際出土した河原石や遺物類が、溝の上に集積されたものであろう。

3~5グリッドでは、8~11、9'~11'グリッドから、ほとんど検出されない土器群が出土した。これが、時間的、系統的な相違を示唆するのかは、後章で検討する。又、11'グリッド第

4層から、縄文前期末葉の土器数片と石鏃1点が出土した。本トレンチでは、縄文前期前葉、後葉の土器片が、縄文後期土器に混在したが、第4層がこれらのプライマリーな包含層であった可能性も強い。

#### 〔Cトレンチ〕

本トレンチは、数年前、ブルドーザによって水田化された為、ローム層のかなり深度まで擾乱が及んでいる。遺物はBトレンチよりの、1～4グリッドから、縄文後期土器、石器、平安時代の土器等が出土した。遺物の出土量は少く、まとまりのない出土状況を示すが、平安時代の土器のみは、4グリッドに集中して出土した。4グリッドより東方の11グリッドでは、遺物の出土量が稀薄となり、断片が僅かに出土しただけである。これより東方では、全く遺物の出土を見ない。この事から、11グリッド周辺が、宝鏡遺跡の東限であろうと思われる。この事は、Cトレンチ東方、細川氏宅前の立合調査に於いても確認された。

### 3. 遺 構

#### (1) 土 壤 及 び 出 土 遺 物

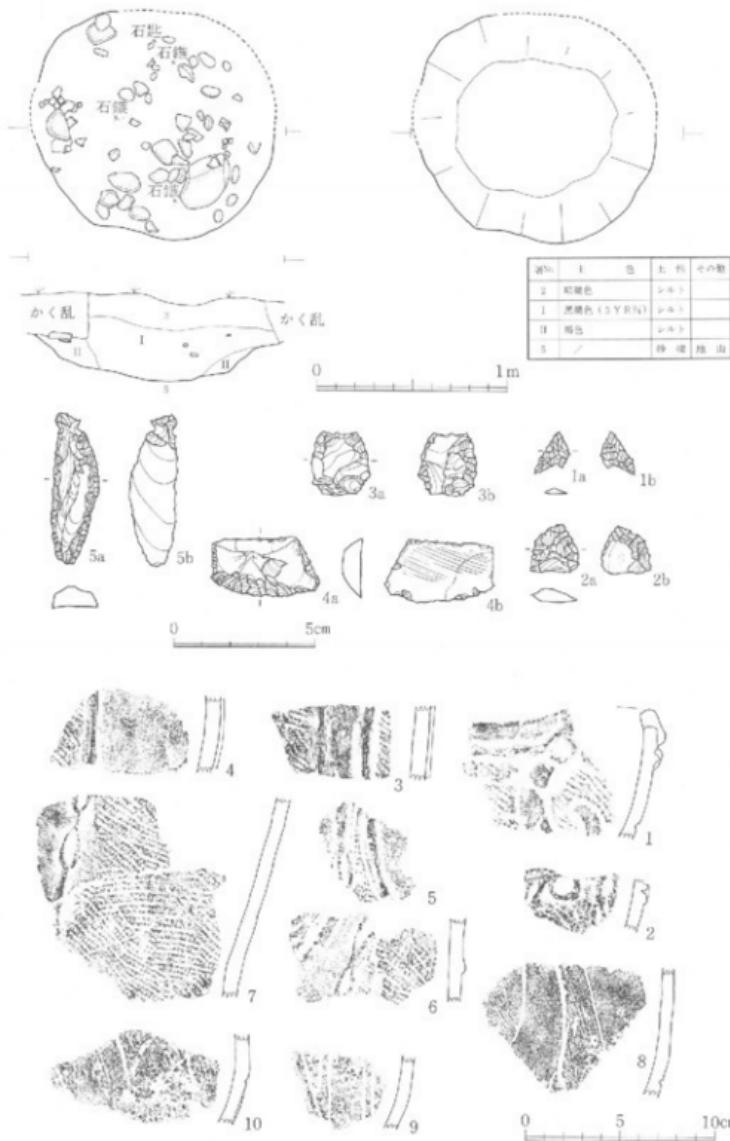
〔土 壤〕 Bトレンチ5、6グリッドの中間で発見された。確認面は第2層下面であるが、第1層は、調査以前に除去されていた。平面形、規模は、不整形形を呈し、長軸1.28m、短軸1.18mである。堆積土は2層あり、Ⅰ層は、厚く、水平に堆積している。層厚は、25cm前後で上部に人頭大～コブシ大の河原石、土器が、中部から石器類が出土した。Ⅱ層は、壁に沿って斜めに、薄く堆積している。遺物の出土はない。土壌は、段丘疊層を盛り込んでいる為、底面は径10cm内外の砾石であるが、堆積土Ⅱ層は、日地的な役割を果したのであろう。

#### 〔出土遺物〕 上塙出土の遺物には、土器と石器がある。第5図

土器は、いずれも破片で、47点出土した。(1～7)は、隣線文、沈線文、縄文によって文様が描かれる。(1)は、口縁が内彎し、小突起がつく。突起下に、ボタン状貼付文がつき、そこから両サイドに隣沈文が伸びる。体部には、ボタン状貼付文を起点として太い2本の沈線でL状文を描き、その他の部分にL.R縄文が施文される。(2)は、ボタン状貼付文と連鎖状隣線文が見られる。(3)～(7)は、隣線文、隣沈文又は連鎖状隣線文で区画した一方を磨消し、他方に縄文が施文される。(3)(4)と(7)(6)は同一個体で、(6)、(7)には、L.R縄文が施文される。

(8～10)は、地文(縄文、撚糸文)と沈文によって文様が構成されるもの。(8)は、太さの異なる沈線によって文様を描き、沈線間の撚糸文を磨り消す。(10)は、磨滅が著しいが、(8)同様に磨消撚糸文を意図したと思われるが、磨きが不充分である。(9)は、縄文施文後、集合する沈線を施文する。

石器は、5点出土した。内訳は、石鏃2、石匙1、不定形石器2である。石鏃は、いずれも



第5図 土壙とその出土遺物

無西で、(1)は凹基のもので側縁がふくらむタイプ、(2)は平底で、側縁がふくらむ。長幅指数はほぼ1:1のズングリしたタイプである。石匙は、縱長剝片を用い、打面部を調整してつまみ部とし、背面の周辺にのみ入念な調整が加えられる。

(3)～(4)は、不定形石器である。(3)は、素材のa、b両面に調整を加えたもの。(4)は、横長剝片を用いている。a面の三方に、入念な調整が加えられるが、b面は、平滑な面をなし、調整は加えられない。

## (2) 溝 状 遺 構

Bトレント11～10グリッド及び10'グリッドにかけて検出された。確認面は、第1層である。巾、約50cm、深さ約30cm、断面形はJ字形を呈し、11グリッド東端から10区西端にかけて、ゆるい弧状に削堀されている。溝上部には、多量の河原石が集石されており、河原石に混じって縄文土器、石器、現～近代のガラス瓶、ビニール布片等が検出された。溝の埋土は単層で、溝の使用廃絶後、一気に埋められた事が知られる。埋土中には、若干の縄文土器片、現～近代のガラス瓶片や軽石（浴用）等が検出されたのみである。

この溝状遺構は、10グリッドから、更に10'、9'グリッドの一部に断続的に延びている。尚前記した理由から、本遺構を現～近代の削堀によるものと認め、以下、記述を割愛する。

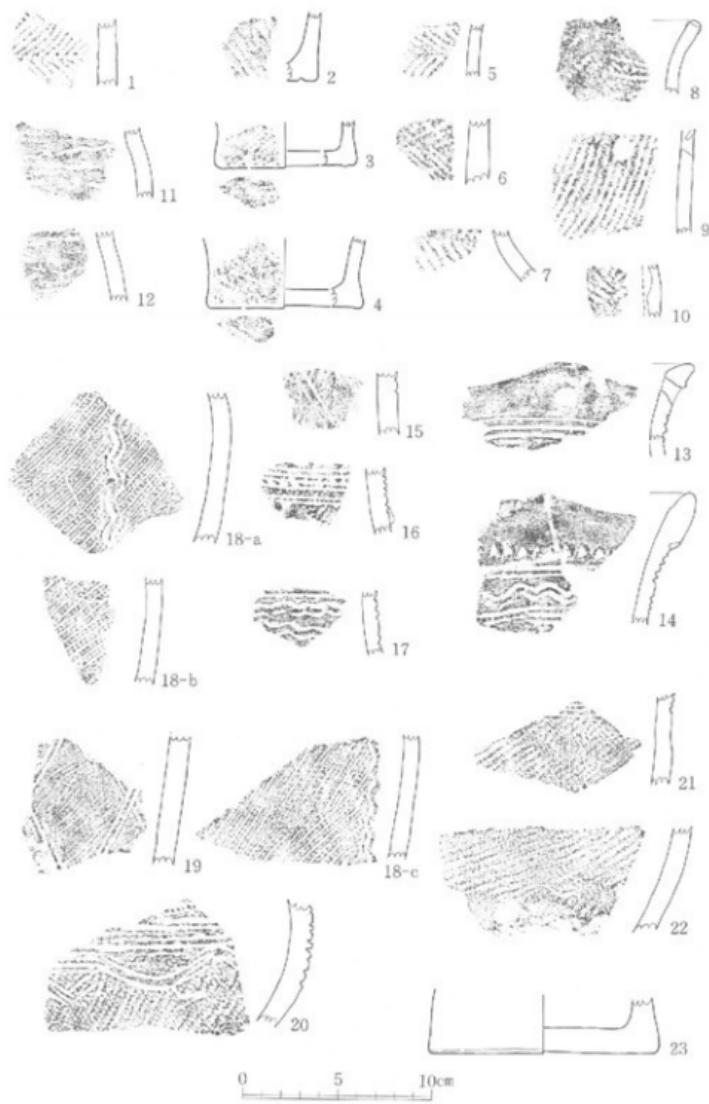
## 4. 出 土 遺 物

発掘調査によって出土した遺物には、縄文土器、須恵器、赤焼土器、蓋形土製品、土器片利用円盤、各種石器、剝片がある。須恵器、赤焼土器の出土は僅かで、大部分は縄文土器である。縄文土器は、前期のものを僅かに含むが、その大部分は後期の土器である。後期の土器は、以下に記述するように、後期初頭～前葉の特徴を有するものであるが、文様の施文技法、モチーフ、構成等の点で、種々の要素を有するものが混在しており、いくつかに分類が可能である。但し、層位的に区別ができるもの、或は、遺構等に於いて一括して得られた資料がなく完形又は器形の判明するものも少いため、分類に当たっては、主として文様の施文技法、モチーフ等に重点をおかざるを得なかった。

土器以外の土製品としては、4辺に4孔を有する蓋形土製品、多量の土器片利用円盤がある。石器類は、出土総数843点、内、製品、未製品は130点である。多量の剝片は、石質が鉄石英によって大部分を占める点が注目される。尚、剝片等（石核、原石を含む）については、不本意ながら今回は触れない。

## (1) 縄文前期の土器 第6図

Bトレント11グリッドから、少量づつ出土した。11'グリッド4層から、後述する2群土器片数点と、本グループに伴うと見られる石鏃1点が、やや、まとまって出土した以外は、散發



第6図 縄文前期土器

的な出土状態を示す。

縄文前期土器には、胎土に纖維を混入するもの〔I群〕と、混入しないもの〔II群〕がある。

**I群土器** これには、羽状縄文、斜行縄文、ループ文等の施文されるもの（1類）と、結束のある撚糸文の施文されるもの（2類）がある。

**1類** 資料は、口縁部：1、体部：7、底部：2の計12片で、胎土に多量の纖維を混入する。(1)、(5)は、結束のある羽状縄文を有するもの、(7)は、結束のない羽状縄文、(6)も羽状縄文であろう。(10)は、上、下に方向を変えて施文し、部分的に菱形の構図をなす羽状縄文である。(9)は、斜行縄文が施文されるもの。(2)～(4)は、ともに基底部がやや外側にはみだす底部片で、底部外面にも縄文が施文される。色調は、灰褐色を呈するものが多く、にぶい褐色、橙色等を呈するものもある。焼成、保存状態は不良で、脆弱である。

**2類** 結束のある撚糸文、いわゆるS字状連鎖撚糸文の見られるもので、纖維の含有量は、1類より少い。(11)、(12)、ともに、にぶい橙色を呈し、1類より堅緻である。

#### **II群土器 第6図13～23**

口縁は外反し、窓を有するもの(13)と、肥厚し、下端に爪形文を有するもの(14)がある。いずれも、口縁上部は無文帯となり、以下に併行沈線によって、横位直線文、鋸歯状文等が施文される。(13)～(14)は、体部には、縄文を地文として縦位、横位の直線文、鋸歯状文やX字状文(15)、(16)等が併行沈線によって描かれる。地文には、斜行縄文L型(20～22)と、付加条縄文第1種L+L+L(18)、(19)がある。(20)は、かなり強く膨む体部破片であるが、(23)は、体部下半が筒状にすぼまり、体上部が球状に膨む鉢形土器と思われる。文様は、斜行縄文を地文とし、併行沈線による横位直線文を描き、その下限に鋸歯状文が一段巡る。上から4列目の横位直線文上には、爪形の押引文を連續して施文し、後、上部をナデて消去している。(25)は、横位直線文間にまたがって爪形文が連續して施文され、一部に貼コブがつけられる。

器厚は、7～11mmと全体的にかなり厚手である。内面の器面調整は、横位の入念なミガキによるものが多い。色調は、灰褐色を呈するものが大半で、にぶい橙、浅黄橙、明褐色等を呈するものもある。

#### **縄文前期土器の年代**

**I群** 1類土器は、胎土に纖維を含有し、羽状縄文、斜行縄文、ループ文等を施文する点で、前期初頭に対比される。内面に擦痕等の見られない点、底部が平底である点等から見て大木1式に比定されよう。I群2類土器は、結束のある撚糸文のある点から、大木2式に比定され、大木2b式には纖維を含まないとされている事から、大木2a式に比定されよう。

**II群** 土器は、口縁部が肥厚し円窓のつくものがあり、体部上半には、斜行縄文等を地文とし平行沈線により縦、横位の直線文、鋸歯状文等による圧縮された文様帯がある。体部の文様要

素としては、併行沈線文、爪形文、貼コブ等がある。文様帶は、通常、体部上半に限定されるが、稀に体部下半に及ぶものがある。その場合、併行沈線によるX状文、縦位の連続鉢齒文に限られる。以上のような特徴を有する土器群は、大木6式（奥野：1970a）及び大木5b式（奥野：1970b）に近縁のものと思われる。大木5b式は、登米郡南方町長者原遺跡出土資料を標準として、奥野氏によって提唱されたもので、II群土器と比較すると、口縁部に円窓を有する点、併行沈線による横位の直線文、鉢齒文等による狭い口頭部文様帶を有する点、体部に、併行沈線によるX字状文等の見られる点で近似する。但し、大木5b式の最も大きな特徴の一つである、口頭部の連続鉢齒貼付文帶が、II群土器では欠除している。又、大木6式に、まま見られる爪形による押引文は、大木5b式には顕著でない。更に、2023は、器形の点でも大木6式的である。

以上のように、II群上器は全体的に見て、大木5b式から大木6式に至る、過渡的な時期を専有するとと思われる。この事は又、大木5b式から大木6式への移行が、漸移的、かつ連続的であった事を示唆するものであろう。

## (2) 平安時代の土器 第28図

C T 4 グリッド、B T 2、6' グリッドから少量づつ発見された。B T 2、6' グリッドからは各1片の出土で、他はすべてC T 4 グリッド出土である。内訳は、復原土器2点、破片11点である。

いずれも整形に際しロクロを使用しているが、焼成、色調、形態等から二分できる。

### 赤焼土器

整形に際しロクロを使用し、外間に再調整を加えないもの。底部の切離しは、回転糸切無調整である。資料は、壺4個体で、内2個体は復原された。(1)は、底部から内輪気味に外傾し、口縁部は単純に外傾する。推定口径14.9cm、底径6.8cm、器高4.3cm。(2)は、底部から体上半にかけて、膨みをもって外傾し、口縁部は強く外反する。内面底部附近にミガキ調整が僅かに認められる。推定口径13.3cm、底径6.8cm、器高4.3cm、色調は、両例ともに浅黄橙色を呈する。

### 須恵器

壺と甕がある。甕の整形、調整技法、底部切離し等は、赤焼土器と同様である。いずれも小破片で、形態は不明であるが、口縁部は単純に外傾するものがある。甕は、外面ケズリ、内面ロクロ調整によるもので、体下部の破片と思われる1点である。焼成は、還元焰焼成によるもので、色調は、にぶい褐色を呈するものが多く、灰オリーブ、オリーブ灰色等を呈するものもある。赤焼土器より、かなり堅緻である。

### 編年の位置

上記の特徴を有する土器は、従来、表杉ノ入式（氏家：1967）として理解されて來た。最近の調査等によって、表杉ノ入式の新旧関係が論じられる段階に至っているが、ここでは単に、表杉ノ入式期、その年代については、赤焼土器の形態が近似する仙台市安久東遺跡第2号住居跡出土の灰釉陶器の年代を11世紀頃（土岐山：1980）と考えられている事から、本遺跡出土の赤焼土器も11世紀前後と考えておきたい。

### (3) 繩文後期の土器

繩文後期前葉に包摶される土器群で、宝領遺跡出土土器の大部分を占める。

各トレンチから出土したが、A およびC トレンチでは、その量は微少である。特に、B トレンチ9～11区、9'～11'区から集中的に出土した。前述したが、今回の調査地点は、以前から畠地として利用され、一部（C トレンチ）は水田化されるなど、保存状態は極めて悪い。B トレンチ（以下トレンチをTと略す）10～11区、10'～11'区にかけて、遺物包含層が確認されたが、その範囲を正確に把握する事はできなかった。従って、土器の分類に当っては、遺物包含層を中心とする、B T 9～11区、9'～11'区出土土器の内、基本層位第2層出土土器を基本として行い、これを便宜上、第一土器とし、以下、B T 6～11区、6'～11'区第1層出土土器を第二土器、B T 2～4区出土土器を第三土器と區別して記述する。

出土土器は、完形又は器形、全体的な文様構成の判明する資料が少いため、文様の施文技法モチーフ等を主とし、これに、文様構成、器形等を加味して行った。分類に先立つて、土器の全体的な特徴を述べる。但し、後章で、A～D の4つにグルーピングしたが、各グループ間に特に際立った変化も認められず、一方、C、D グループの土器は、量的にも少い。従って、以下の土器の特徴は、明記しない限り、A、B グループの土器に関するものである。

#### 胎 土

胎土には、すべて砂粒又は小石を多量に混入する。砂粒、小石は、通常1mm未満のものであるが、中には、3mmを越えるものもある。金雲母等の、特徴的は混入物は通常、含まない。但し、無文の袖珍土器の壺と思われる小破片に、多量に金雲母を混入するものが1点存在する。A、B グループに比較して、D グループでは、比較的、均一な砂粒を含む傾向が伺える。又、第16図7は、胎土に赤褐色の鉱物？、白い細粒を含む等、D グループとともに、本遺跡にあっては、異質な存在である。

#### 色 調

A グループでは、橙、淡橙、明褐灰、灰赤、褐灰色等を呈するものがあり、前3色が多い。B グループでは、明褐灰、にほい橙、淡橙、橙色、赤橙、灰赤色等を呈するものがあり、後

2色は少い。

C グループでは、灰白、淡橙、明褐色、灰赤、褐色等を呈するものがある。

D グループは、浅黄橙色等を呈し、第16図7は、にぶい橙色を呈する。

### 器面調整

全般的に保存状態が不良で、観察不能の例も少くないが、内面の一般的な最終調整は、横位まれに継位のミガキであるが、ナデによるものもある。前段階のケズリの痕跡を残すもの、ミガキ又はナデ調整を行わないものもある。底部内面も、ミガキが多いが、ケズリ、カキメの痕跡を残すものもある。外面の、施文部分以外で見られる器面調整は、文様帶の長軸に沿ったミガキが多い。ミガキが不徹底のため、ケズリの痕跡を残すものもある。底部附近は、底面から2~3cmをミガキによる無文帯とする場合が多く、稀に、横位の連続するケズリによるものがある。

### 其の他

器面調整後、土器の内、外面に朱彩した例が僅かに見られる。総数、8ヶ体が確認され、内、4ヶ体が両面、他は、片面である。朱彩例をグループ別にみると、A グループ：0、B グループ：1、C グループ：0、D グループ：1、他は、いずれも無文の小破片である。土器面が荒れていて、観察不能のものも少くないが、その点を踏まえても、宝鏡遺跡の縄文後期前葉の上器には、縄文、沈線文、隆線文等を施文後に、朱彩する手法は、一般的に行われていないという事が言える。

上器の内、外面に炭化状の物質等の附着するものも相当量認められた。その多くは、黒くスス状に薄く、器面に附着するものが多く、底部内面に、厚く凝固していた例（第10図12）は、少い。

## 第一 土 器

### 1 群 土 器

口縁部、又は文様帶中に隣線文を持つものを一括した。これには、隣線文が口縁部から体部文様帶に及ぶもの〔I類〕、隣線文が口縁部附近に限定されるもの〔II類〕、口縁部が、極端に肥厚するもの〔III類〕がある。

〔I類〕 隣線文が、口縁部及び胴部に及ぶもの。隣線文の一部に砲弾状の刺突文が加えられる一連鎖伏隣線文一もの。第7図（7を除く）、第8図19~21、第13図7。

〈a種〉 第7図1。胴部は強く膨み、口縁部は僅かに内反し、安定した底部を有する浅鉢形土器である。口縁は、4個の波状口縁をなし、口縁に平行して隣沈線が巡り、その上部に砲弾状の刺突文が等間隔に連続施文される。胴部文様帶は、波状口縁頂点下を起点とし、隣沈文（沈線は部分的である）によって方形に区画し、その内部に（R.L.）縄文が充填される。隣

沈文の始点とコーナーには、2ヶ連続する砲弾状刺突文が加えられ、いわゆる連鎖状隆線文を構成する。波状口縁頂点下に、隆線を間に、2ヶの盲孔が施文される。無文部分は、その長軸方行に沿ってみがかかる。底部外面は、無文である。

（b種） 第7図3～6、8、9。文様及び施文技法等は、（a種）とほぼ、同じ特徴を有する。但し、器形は(5)を除いては深鉢と思われる。特に(9)は、底部からほぼ直線的に立上るプロポーションを示し、恐らく、体部上半から口縁にかけて、かなり強く膨む、(2)のような形態をとると思われる。(9)は、底部に網代圧痕を有する。

（c種） 第7図2、第8図19～21、第12図9、10。波状口縁頂点下部に、円窓を持つもの。第7図2は、体部が強く膨み、口縁は内反する。口縁は、4ヶの退化した橋状突起をなし、突起間は、更に小波状となる。体部下位は、筒状に直線的に底部にいたると思われる。突起上には、C字形の沈線文があり、その下部に円窓がうがたれる。突起下部から、口縁に沿って左右に延びる隆線と、突起下部に、ほぼ円形のモチーフが2重の隆線文によって描られる。一方、小波状口縁下から下垂する、複数の隆線文があるが、モチーフについては不明である。隆線の貼付は、捺糸文施文後に行われ、隆線はいずれも連鎖状隆線である。第8図21は、特異な形態、文様を有する突起部で、見ようによつては、人面、獸面を表現したものとも見える。

(19、20)は、ともに波状口縁を呈し、口縁に平行する隆線文と、波状口縁の頂点下から下垂する、複数の連鎖状隆線文が見られる。波状口縁頂点下に、(19)では貫通孔、(20)では盲孔が見られる。第12図9、10は、橋状突起をなすもので、突起中央に貫通孔が、内、外面に沈線文が施文される。

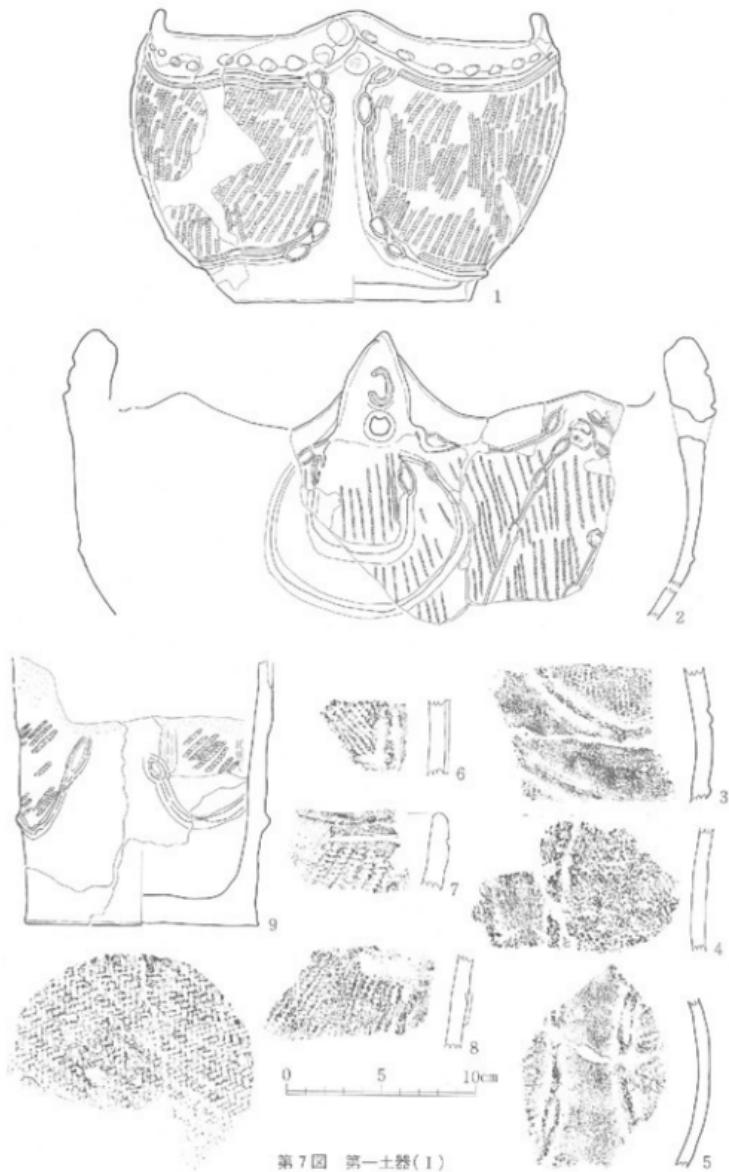
〔II類〕 口縁部又は頸部文様帶に隆線文が見られるもの。ボタン状貼付文を有するものを含む。第8図9～17、26。

（a種） (9)、(10)、(16)は、ボタン状貼付文が、口縁部、頸部文様帶の始点等に附けられる。通常、単独に1個つけられるが、隆線文によって連結される場合(10)もある。(9)、(10)は、ともに頸部から口縁にかけての外反が著しい。(10)は、ボタン状貼付文を起点とし、垂下する巾着文を複線で描く。モチーフ内部に、繩文を有するものと有さないものがある。(16)は、口縁と体部の境に、横位に連続する列点文を有するもので、これを〈a<sub>2</sub>種〉とする。(26)は、繩文帯を区画する沈線間に、ボタン状貼付文風の円形刺突文が見られる。これを〈a<sub>3</sub>種〉とする。

（b種） 磨消繩文帯の上限等に隆線文が加えられるもの。ほとんど口縁部に限られ、口縁部と体部文様帶の区画的な性格が強い。(11)、(12)、(15)、(17)。

（c種） 口縁と体部の境に、横位の低い隆線文が巡るもの。(13)、(14)は、体部に繩文を持つ。

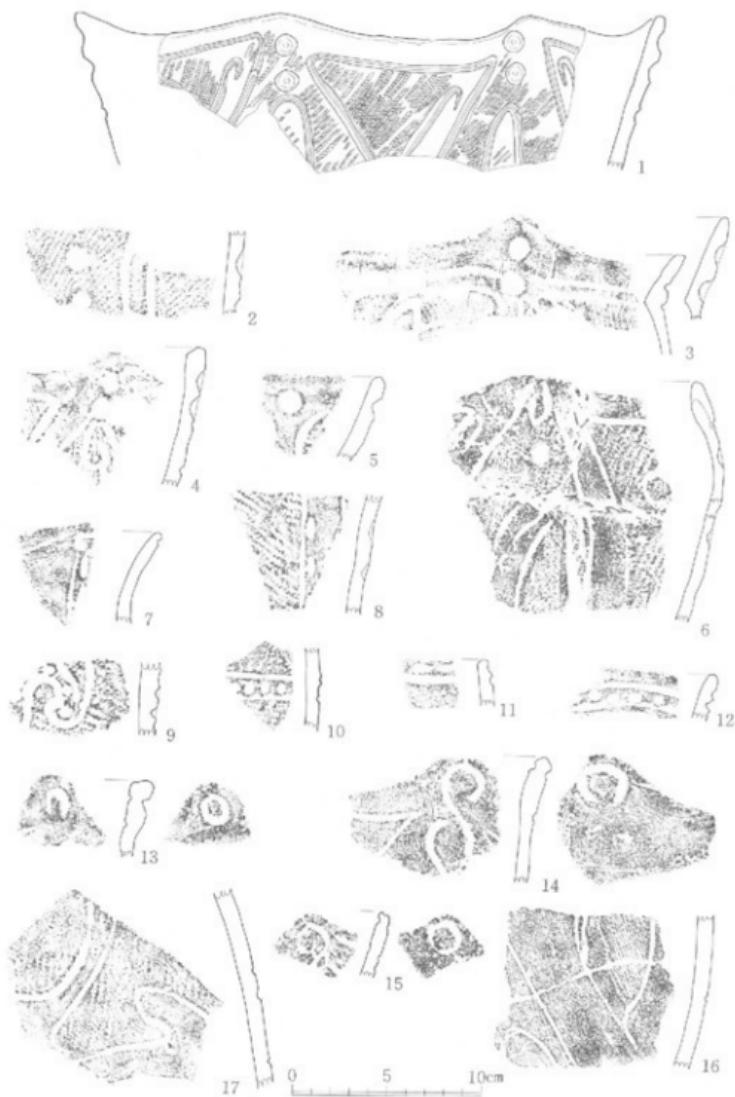
〔III類〕 口縁が肥厚し、口縁内面に陵線又は、沈線状の凹みを有するもの。地文を持たない場合が多い。第8図1～5、18、23。



第7図 第一土器(Ⅰ)



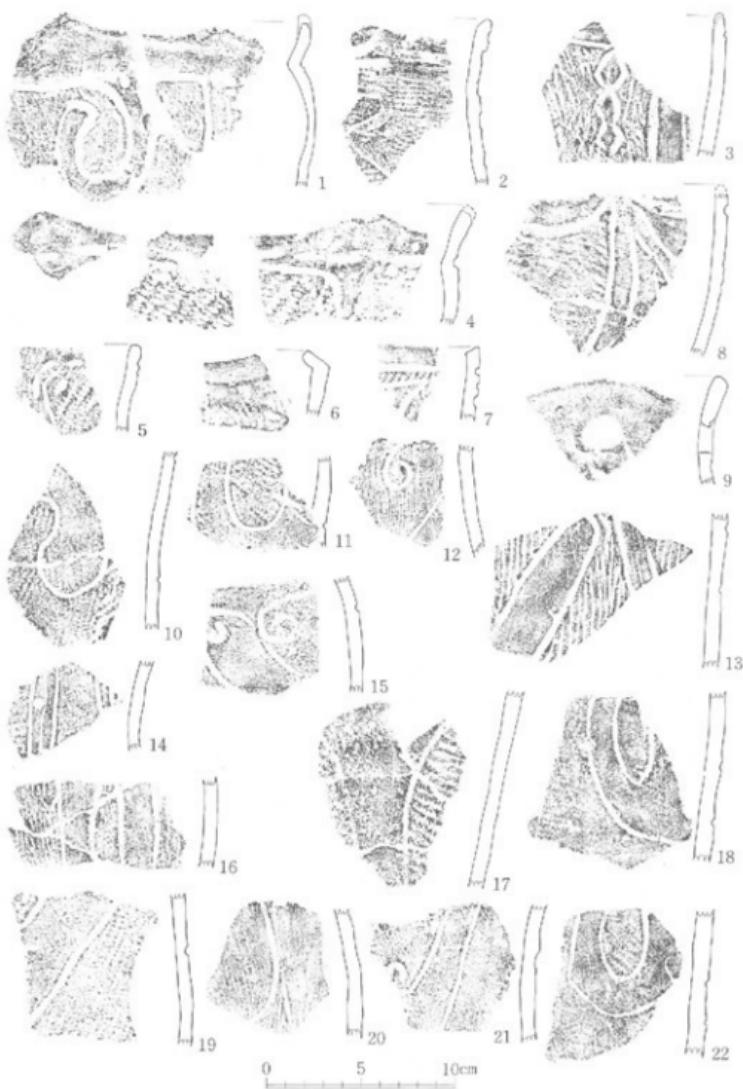
第8図 第一土器(II)



第9図 第一土器(III)



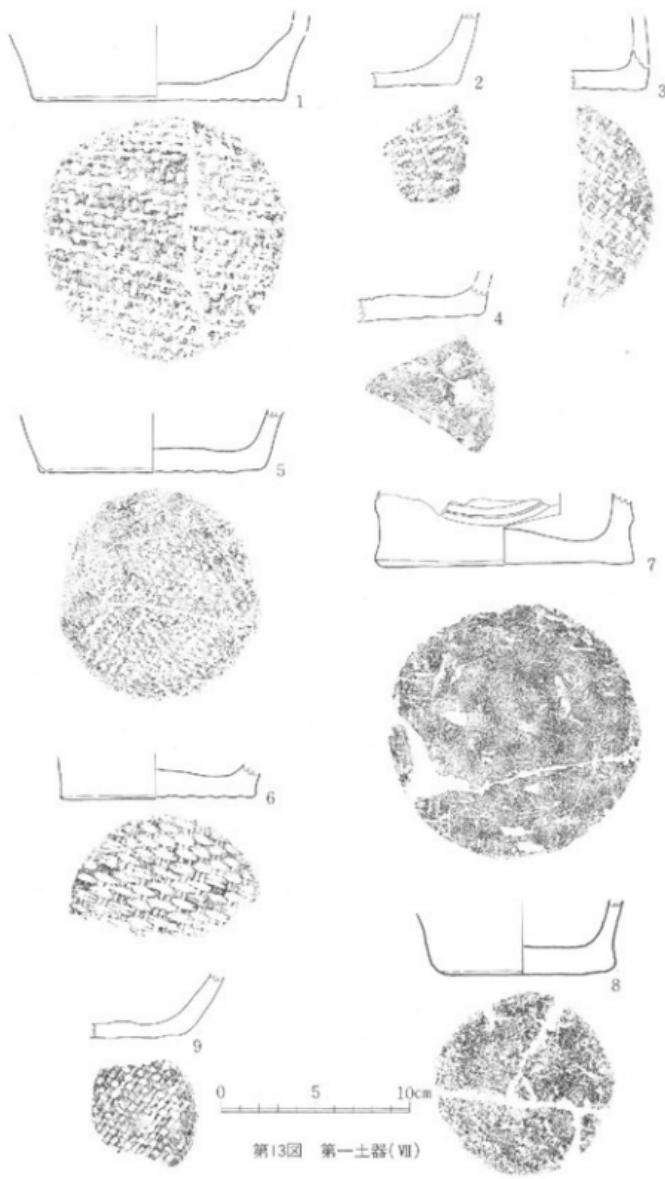
第10図 第一土器(IV)



第11図 第一土器(V)



第12図 第一土器(VI)



第13図 第一土器(VII)

（a種） 口縁断面が菱形状を呈し、太い沈線によって横位の弧状文が重層して描れるもの（1）、（4）、（5）。

（b種） 口縁内、外面に、沈線状の凹みを形成するもの（2）、（3）、（23）。（3）は、肥厚口縁の中央を凹めて沈溝とし、小突起下には、隆線によってブリッジが架けられる。（23）は、体部に多条の沈線による直線文が見られる。これを（b<sub>2</sub>種）とする。

（c種） 口縁部が強く内側する、浅鉢形上器と思われる。口縁内側が肥厚し、波状口縁下に盲孔を有する。口縁部外面には、波状口縁上にブリッジ状の縦位の隆帶が附加され、その両サイドから一条の沈線が巡る。沈線文の始点には盲孔がある。尚、ブリッジ状の隆帶上には、縦位に並列する小円文が3個つけられ、体部には繩文（RL.）が施文される（18）。

（d種） その他のものを一括した（6～8）。（6）は、口縁が外傾し、口唇が外側にそがれる。体部との境が段状に肥厚する（d<sub>1</sub>種）。（7）は、口唇部にかけて、内脣氣味に外傾する。口縁部から口縁部にかけて、極端に肥厚する（d<sub>2</sub>種）。（8）は、破片上部が肥厚し、指頭状刺突文が横位に施文される（d<sub>3</sub>種）。

## 2群 土器

降線文をもたず、沈線文と地文によって文様が描かれ、いわゆる磨消繩文帯を構成するもの。第9図～第11図、第12図1、2～4、7。

〔I類〕 文様帯の起点、稀に文様帯内部に、盲孔が1～2個つけられるもの。第9図1～6。盲孔は、直径10～12mm、断面形が半円形を呈し、波状口縁下に、縦位に2個並列してつけられる場合が多く（1）、（3）、（4）、1個のもの（6）や、文様帯中に見られる場合（2）もある。文様帯は、磨消繩文（撚糸文）による倒立三角状文と倒卵状文が、交互に配置されるもので、文様帯内外に鈎状の沈線文等が副次的につく。口縁部形態は、直線的に外傾するもの（1）、（2）、（4）、（5）「く」の字状に屈曲するもの（3）、内轉するもの（6）がある。

〔II類〕 横位又は縦位の連続刺突文の見られるもの。第9図7～12、第11図4、5。

（a種） 口縁に平行して砲弾状の刺突文列が巡り、以下に、方形基調の磨消繩文帯を構成すると思われるもの（第11図4）。同図5や第9図8は、方形の区画文に沿って、刺突文が巡る。

（b種） 繩文を地文とし、2条の沈線文を描き、その内部に円形刺突文を連続施文する（第9図9、10）。

（c種） 地文をもたず、2条の平行沈線間に連続して刺突文が巡るもの。（11）、（12）は、口縁上部に平行して施文され、口縁部文様帯を形成する（c<sub>1</sub>種）。第9図7は、口縁に平行して横位の沈線が1条巡り、刺突文列は、波状口縁頂点下に直交して施文される（c<sub>2</sub>種）。

〔III類〕 磨消繩文（撚糸文）が盛行するグループの中から、I、II類を除外したものを一括する。第9図13～17、第10図1～17、第11図1～3、8～13、15、17～22、第12図1～4。

器形は、口縁が僅かに内彎するもの(第10図10、12図1)、外反するもの(10図3)、頸部で屈曲するもの(11図2、12図2)等もあるが、全体的に変化に乏しく、体部からほぼ直線的に外傾するものが多い。口縁は、4個のゆるやかな波状口縁を呈するものが多く、口唇部に加飾されるもの、突起を有するもの等は、ほとんど見られない。口縁上部は、数cm巾の無文帯となり、以下に、胴部と一体化した文様帯が展開する。地文には、繩文と撚糸文があり、後者は継方位行のものが多い。

〈a種〉 波状口縁下を起点とし、倒立三角形、倒卵状の磨消文帯が、4単位前後施文され文様帯の始点や、中間部に鈎状文、渦巻文、S字状文等の沈線文が副次的につけられる場合が多い。(第10図1~11、11図12、21)。(第10図12~24、17、18、11図11、13、18、22)等は、本種の体下半部であろう。

〈b種〉 磨消文帯内部に、継位の連続8の字状文、又は類似文様の見られるもの(第10図5、11図3、12図2)。

〈c種〉 波状口縁下に、磨消文帯による、独立した倒卵状文をもつもの。器形は、内彎気味に立上る浅鉢と思われる(第12図1)。

〈d種〉 口縁に沿って一条、波状口縁下から左、右に下垂する二条の沈線によって、文様が構成される。口縁及び沈線間以外の部分には、横位の地文(繩文、撚糸文か他の圧痕か不明)が施文される(第11図8)。(12図3、4)は同一個体と思われるが、口縁部のプロポーションが異なる。

〈e種〉 体部は膨み、口頭部で「く」の字状に外反して、口縁に至る。口縁部は巾広い無文帯となり、体部に網目状の撚糸文を施文し、波状口縁直下に鈎状の磨消帯が見られる。この鈎状の磨消帯は、主文様の中間に配置される、副次的文様にすぎない(第11図1)。

〈f種〉 入り組んだ曲線的な磨消繩文帯を有するもの、磨消繩文のモチーフ及び色調、胎土等から見て、他の磨消繩文土器群と識別されそうである(第9図17)。

〈g種〉 平行する2条の沈線で区画した後、沈線内に繩文を施文した、いわゆる充填手法による磨消繩文帯を有する。口縁は、内彎気味に外傾し、口唇部は、内側にナナメにそがれる(第11図7)。

〈h種〉 横位の地文(繩文、撚糸文か条線か不明)施文後、先端の角張った工具によって横位直線文、下垂する蛇行状(ジグザグ文?)沈線文が、ソフトタッチで描かれる。口縁は、僅かに外反する(第11図2)。

### 3 群上器

2~5条前後の、複数の沈線によって文様が描れるもの。第一土器では、1例のみであるが後出するので一群を設定した。

〔I類〕 縄文施文後、3条単位の沈線文様が見られる。沈線内は、磨消される(第11図14)。

#### 4群土器

地文のみのもの、又は無文のものを一括した。第12図5～8、11図6。

〔I類〕 ほぼ全面に、縄文のみを有するもの。

〔a種〕 壺形を呈する袖珍七器で、全面に縄文(RL)が施文される。(第12図5)

〔b種〕 口縁が、僅かに内側する深鉢で、全面に縄文(RL)が施文されるものを〈b<sub>1</sub>種〉(第12図6、7) 口縁部が内側に屈折し、屈折部以下に縄文が施文されるものを〈b<sub>2</sub>種〉とする。(第11図6)

〔II類〕 条痕(線)文を有するもの(第12図8)。体部中央で膨む深鉢で、ほぼ全面に5～6条単位の条痕(線)文が、縦又は斜めに施文される。施文具は、貝殻条痕に特有の、条線間の影降が見られないことから、櫛状工具等のようなものが想定される。底面に網代圧痕が見られる。

#### 底 部

底部は、58点出土したが、その一部を第13図に示した。底面は、無文のものと網代圧痕、木葉痕を有するもの等がある。

〔I類〕 網代圧痕を有するもの(1～3、6、9)。一部にミガキ調査を行ったものも、本類に含める。

〔II類〕 網代圧痕施文後、全体をミガいて消去したもの(7)。

〔III類〕 木葉痕をもつもの(4)。

〔IV類〕 木葉痕と網代圧痕が重複するもの(5)。

〔V類〕 無文のもの(8)。各種圧痕等の痕跡を全く残さないもの。

各類の出土点数は、I類:17点、II類:2点、III類:9点、IV類:1点、V類:21点、不明:8点である。概して、底径5cm以下のものでは無文が多く、7cm以上のものでは網代圧痕、木葉痕のものが多いという傾向が指摘できる。

#### 第二土器

##### 1群上器 第14図(14、15、22を除く)

〔I類〕 (2～4、12、13、16、18)

〔b種〕 (2)、(3)は本種の口縁部であり、口頸部が段状に張り出す、いわゆる2重口縁を呈する。(13)、(18)も本種に含められよう。

〔d種〕 口縁下端に、連鎖状隆線文帯が巡るもの。(4)は、体部に縄文が施文されるもので、(d<sub>1</sub>種)、(16)は、口縁及び体部に沈線文が見られる。これを〈d<sub>2</sub>種〉とする。

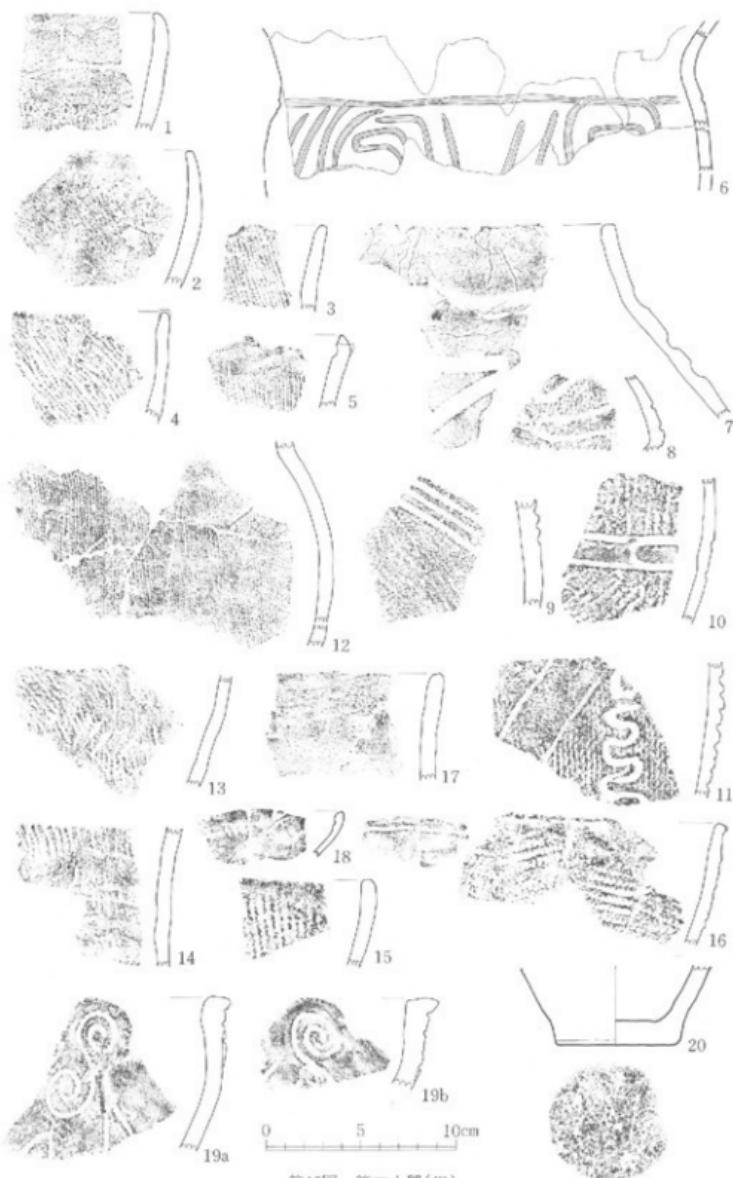
〔e種〕 口縁断面が菱形状をなし、突起下に、連鎖状隆線状文が乗下する。口縁に平行して太い沈線が巡り、始点に盲孔がつくもの(12)。



第14図 第二土器(1)



第15図 第二土器(II)



第16図 第二土器(III)



第17図 第二土器(IV)

〔II類〕 (5~11, 19, 23)。〔II〕を除いて、いずれも〈a, b種〉に含まれる。

〈b種〉 波状口縁頂点下に、T字状の隆沈文を有するもの〔II〕。隆沈線文の下部に盲孔があり、その両サイドに口縁に平行して隆沈線文が巡る。

〔III類〕 (1a, 1b, 21, 24)。〔24〕は、〈a種〉に含まれる。

〈c種〉 (1a)、(1b)は、口縁部断面形では本種に含まれるが、口縁部から体部にかけて太、細2種の沈線及び刺突文による、多彩な文様が見られる点から、これを〈c<sub>2</sub>種〉とする。

〈e種〉 口縁は内縫気味に立上り、端部が「く」の字状に短く外傾する。口縁部と体部の境に、沈線を作り段を持ち、体部側が肥厚する。体部には、縄文施文後に横位直線文、縦位のジグザグ文?が施文される〔21〕。

## 2 群土器

〔I類〕 (第15図15, 18, 19)

〔II類〕 (第15図32) 〈a<sub>2</sub>種〉に含まれよう。

〔III類〕 (第15図1~14, 16, 17, 20~31, 第16図8, 10, 11, 19)

〈a種〉 III類上器のうち、大部分は本種に含まれる。但し、(第15図26)は〈a<sub>2</sub>種〉(同図21, 31)も、モチーフが異なり、文様構成も不明である。これを〈a<sub>3</sub>種〉とする。倒卵状磨消捺糸文帶内部に縦位のジグザグ文が施文されるものを〈a<sub>4</sub>種〉とする(第15図11)。

〈b種〉 第15図17

〈i種〉 体部がソロバン玉状に張り出す、小形の壺である。入り組んだ、曲線的な磨消繩文がみられる(第16図8)。

〈J種〉 縄文帯のほぼ中間に、2条の横位平行線によって区画された、狭い無文帯がありそのある部分にブリッジ状の短線を描くもの。縄文は、無文帯を境に縦位、斜位と走向が変る(第16図10)。

〈k種〉 波状口縁上部に、半円状の突起がつくもの。波状口縁下に、縦位の人組渦文を描き、以下に磨消文帯が見られる(第16図19a, 19b)。

〔IV類〕 地文を有さず、研磨された器面に、太い沈線によって文様が描かれるもの。地文を有さない点で2群上器と相違する点もあるが、一応、2群に含めた(第16図6, 7)。

〈a種〉 頸部で屈曲して、口縁が外反する壺。口頸部は無文で、体部には、上限を横位直線文で区画し、以下に、下垂する直線文、曲線文が見られるが、モチーフは不明である(第16図6)。

〈b種〉 大形の壺である。球形に膨む体部に、内縫気味の口縁がつく。口縁部は無文で、頸部に横位直線文、体部には曲線的な沈線文が見られる(第16図7)。本土器に見られる沈線は線巾9~12mmと際立って広く、線の底面にまで明瞭なミガキ調整が見られる。七器の内、外面

は、横方向の入念なミガキ調整が行われ、一部に光沢をはなつ。

### 3 群 土 器

(I類) (第16図9)

### 4 群 土 器

(I類) (第16図15、16) は〈b種〉に含まれる。

(III類) ほぼ全面に、撚糸文が施文されるもの(第16図1~5、12、13)。口縁部は、内寄  
気味のもの(1、2)と直行又は、僅かに外傾するもの(3~5)がある。(12)は、体部が強く  
膨むものである。

〈a種〉 口縁部に無文部があるもの。(1)は平口縁、(5)は波状口縁で、一部に切れ込みを有  
する。

〈b種〉 口縁上部から撚糸文が施文されるもの(2、4、5)。

### 5 群 土 器

外面に全く文様を持たないもの、内、外面に1条程度の直線文を持つものも含める。

(I類) 口縁上端が外側にマクれるもの(第14図15)、と僅かに肥厚するもの(第14図14)、  
肥厚しないもの、(第16図17)がある。

(II類) 体部から、かなり立上る小形の浅鉢と思われるもの。口縁内面に、1条の横位直  
線文が見られる(第16図18)。

(III類) 口縁直下に、1条の横位直線文をもつもの(第18図1)。

### 把 手 等

(I類) 「8」の字状の把手を有するもの。かなり、大形の土器で把手を中心に、横位、弧  
状の隆線文や、モチーフ不明の沈線文等が施文される。弧状隆線の始、終点に盲孔が加えられ  
る。体部は、把手中央を中心に外側する(第17図1)。

(II類) 体部は不明であるが、橋状把手部分と思われるもの。中央に盲孔を配し、上、下  
に「の」の字状の沈線文が見られる(第17図2)。1群T類B種に含まれよう。

(III類) 半円状の口縁突起で、中央に一孔があり、その周辺に、外面に2条、内面に1条  
の太い溝状の沈線がみられる(第17図3)。

### 底 部 第17図4~12

(I類) (第17図10)

(II類) 網代圧痕をミガキなどによって消去したもの(7~9、12)。本類には、ある一定  
部分のみをケズリによって完全に消去したもの(9)(IIb類)、全体的に、ラフなミガキ、ケズリ  
によって圧痕の過半を消去したもの(7、8)(IIC類)がある。

(III類) (第17図5、6)



第18図 第三土器(Ⅲ)  
1-10: 2区  
11: 3区  
12-17: 4区

[V類] (第17図4、11)

### 第三土器

B T 2区～4区出土土器を、第18図に一括した。内訳は、2区：1～10、3区：11、4区：

12~17である。以下にこれらを一括分類する。

## 2 群 土 器

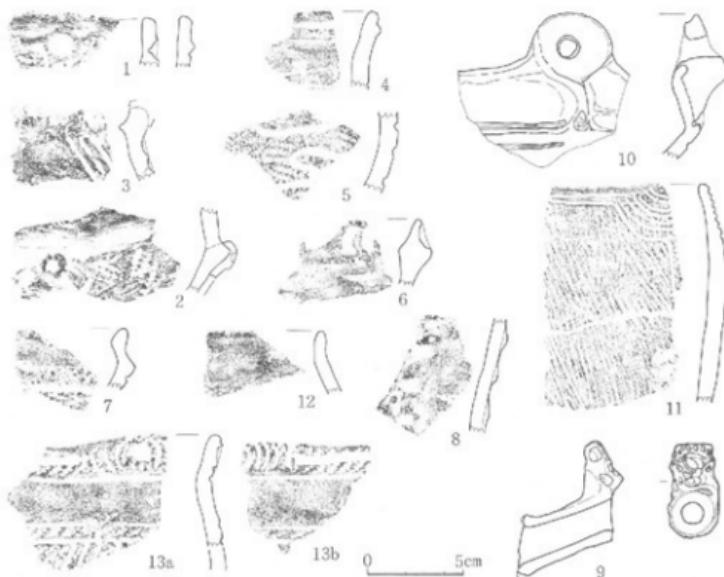
(Ⅲ類) (8)の磨消繩文のモチーフは(g種)に近いが、口縁部形態が不明で、磨消繩文も充填手法によると思われるもので、これを〈g種〉とする。

(VII類) (c種)、2条の併行する線によって、モチーフが描れるもの。形態は、体部が球形に張り出し、頸部で屈曲して口縁が外傾する壺である。モチーフは、口縁上部に3条、頸部に2条の横位直線文を描き、ところどころを縦線で連結する。体部には、曲線的に入組文がみられる。沈線溝内に、僅かに朱彩の痕跡が認められる。表面的観察ではあるが、他の出土土器と胎土が異なる。

## 3 群 土 器

(I類) (4)

(II類) 繩文、又は撚糸文を地文として、多条の沈線文が施文されるもの(3、5、9、12~15)。(3)(5)には、弧状、交錯するモチーフが、(9、12~15)では、口縁から底部近くまで、



第19図 Bトレンチ追加及びCトレンチ出土土器

縦位直線文が見られる。(12)は、唯一の口縁部で、口縁上部に僅かな無文部を残し、体部文様帯との境に横位直線文を巡す。体部文様である縦位直線文の始端は、鈎状に小さく、曲り、横位直線文に連続する。

〔Ⅲ類〕 地文をもたないもの(2)(7)

(2)は、縦位の円形刺突文列を境に、相反する矢羽根状の沈線文が見られる。

#### 4 群 土 器

〔Ⅳ類〕 (a) 体部から、ほぼ直線的に内傾し、内向口縁下部に陵線がめぐる。体部には、細い撚糸文が縦位に施文される。

#### 底 部

〔Ⅴ類〕 (第18図6、16、17)。

### Bトレンチ出土及びCトレンチ出土土器 第19図1～13

Bトレンチ出土追加分と、Cトレンチ出土土器を一括して記述する。

(1)は、口縁に平行する隆沈文の一帯に、円形刺突文を加える。(2)は、いわゆる2段口縁をなし、下段との境にボタン状貼付文が加えられる。体部には、RL繩文を、方向を変えて施文する。(3)は、口縁端部が欠失しているが肥厚するとと思われる。口縁内面は、底状に鈎が巡る。外面には、斜行する2条の沈線内部に長橋円形の刺突文が連続して施文される。(4)は、口縁部に断面半円状の隆帯が巡る。焼成、色調は、(1)に近似する。(6)は、口縁断面が菱形状をなし、太い沈線による縦位の弧文が見られる。(7)は、肩部で「く」の字状に屈曲して、口縁は外反する。肩部に、太い横位直線文が見られる。(8)は、縦位の隆起線上に、横位の刻みが等間隔で施文される。(9)は、宝鏡遺跡で唯一の注口部である。土器の形態、注口部がどのような状態でとりつくのかは不明である。(10)は、肩部が「く」の字状に屈折し、口縁端部は、短かく外傾する。大型の円形突起から肩部にかけて、隆線によって連続される。その終点に円形刺突文が施文される。(11)は、体部から口縁部にかけて内脛気味に立上る。撚糸文を地文とし、口縁部に7条前後の下向弧文を重層させ、そこから、横位・縦位直線文が延びる。斜行する線も見られる。(12)は体部が内傾し、口縁部が直立して立つ。無文である。(13a、b)は同一個体で、ともにCT2区出土である。口縁は、ゆるやかな波状口縁で、文様帯が口縁部と体部に分離される。口縁部文様帯は、波状口縁頂点下に半円状文を配し、その左右に縦位の弧文が重列し、次の弧文帯との間に、太い沈溝が施文される。体部文様帯は、2条の横位直線文を描き、そこから斜行する下垂線文が4～5条見られる。この下垂線の上端は、鈎状に小さく折れ横位直線文に連続する点で(第18図12)と共通する。文様帯は、いずれもLR繩文を地文としているが、全面に繩文を回転した後、文様帯の中間を擦消している。

#### (4) 土 製 品

##### 蓋形土製品 第8図22

扁平で、円形を呈する小円盤状土製品である。表面には、6重の渦巻文が沈線によって描かれ、その一番、外側の線に沿って相対する位置に、4ヶの貫通孔がうがたれる。裏面は、入念なミガキ調整が行われている。横断面は、中央部が最も厚く、両端にいくに従い、器厚を減じる。

後期前葉の前後に、蓋形土器の多出する事が知られているが、その多くは笠形を呈し、本例の如き円盤状のものは少い。類例は、千葉県貝の花貝塚出土例があり、壺等の蓋と見ている。時期は、貝の花貝塚Ⅳ群土器 一称名寺式、堀ノ内I、II式一に属すると言う。(八幡・関根他:1973、第239図32)これによつて、本例も蓋としておく。

##### 土器片利用円盤 第20図~22図

土器片の周囲を打欠き、又は磨いて、ほぼ円形に仕上げたもので、総数で50点出土した。この種の遺物については、従来、円盤状土製品、土器片利用の円板、メンコ、上製円盤等と呼称されてきた。ここでは、土器片を利用する事が最大の特徴であり、整形に際しても、周縁の丸味を意識して製作されている点を重視して、上記の名称を用いた。

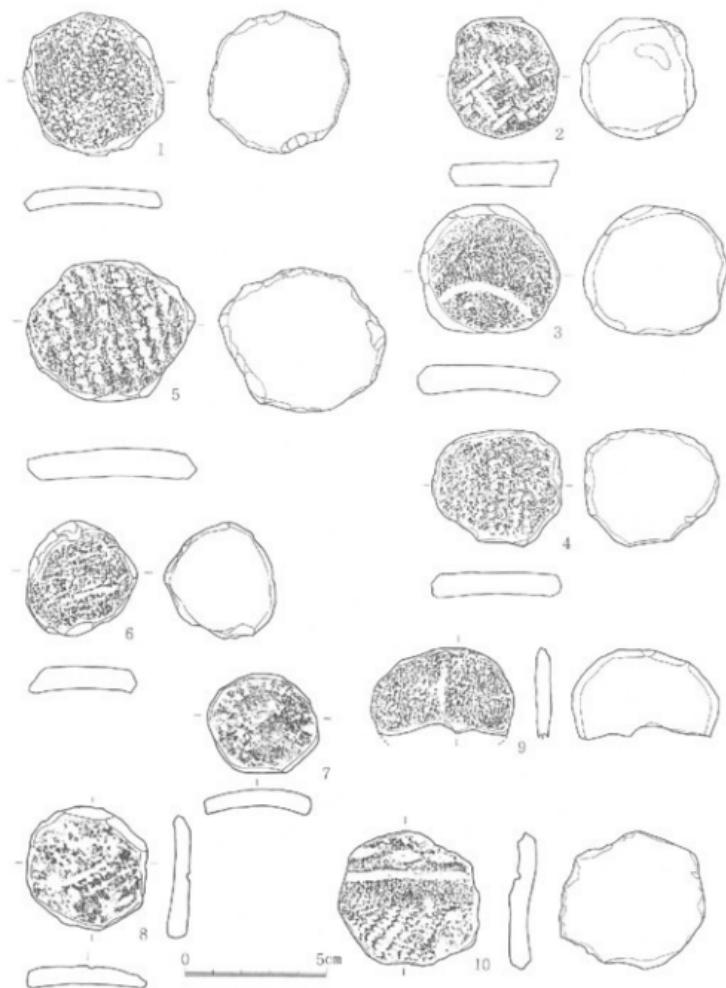
出土状況については、第2表に示したが、B T11~10、11'~10'区に集中する傾向がうかがえ、他区出土のものは8点である。A、Cトレンチからの出土は無い。出土状況において、特別な傾向は見られなかった。強いて言えば、土器の集中する地区で、土器に混在するのが一般的な傾向と言える。

大きさは、最小が2.65cm×2.15cm、最大が7.44cm×7.00cm、3~4cmを中心に、その前後1cmに及ぶもので大部分を占める。平面形は、円形を基調としているが、厳密に長、短軸の比が等しいものは少く、扁円形、不整円形をなす場合が多い。長軸と短軸の比が30%を越えるものではなく、通常、その比は10%未満である。土器の利用部位は、底部、口縁部各1例を除くと、すべて体部である。厚さは、0.49cmから1.16cmまであるが、1cmを越えるものは1例のみで、0.7~0.9cmのものが、全体の約70%を占める。土器の器厚の出現頻度に、ほぼ等しい。重量は2.9gから40.6gまであり、6.0gから20.0gの間に集中する。全資料の平均値は11.4gである。

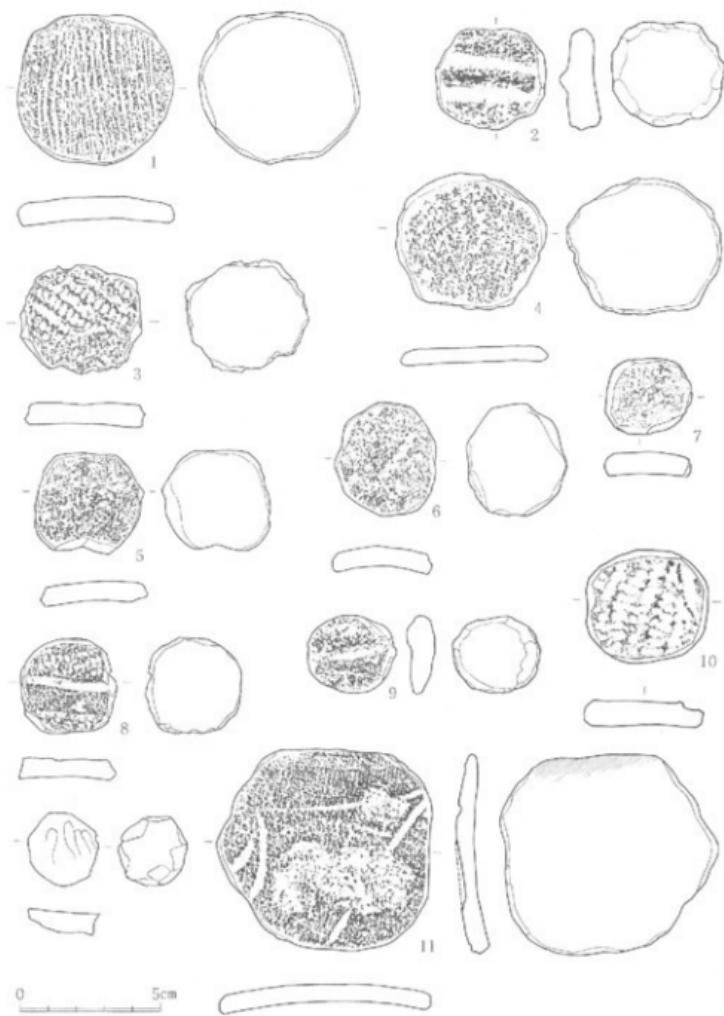
本製品は、ほとんどすべてが敲打調整によって、そのほぼ全周又は一部が整形され、ほぼ円形に作り出される場合が多い(第21図11のみ、平坦な口縁の一部を未加工のまま残す)。其の後一部又は全周を研磨して仕上げたものがある。その加工の度合を、佐藤・吉岡他:1981、によって、以下のように区分した。

a:周辺を打ちかくが、一部が未加工のまま残される。

b:周辺をきれいに(ほぼ全周)打ちかいたもの。



第20図 土器片利用円盤(Ⅰ)



第21図 土器片利用円盤(II)



第22図 土器片利用円盤(III)

c:周辺をきれいに打ちかき、一部を研磨するもの。

d:周辺を打ちかき、周辺の50%以上を研磨するもの。

e:周辺を打ちかくが、土器の接合面や口縁部（の一部）をそのまま利用しているもの。

以上の敲打、研磨等の加工は、周縁部に限られ、内、外縁等の平面に及ぶものは無い。

該種資料の、県内の類例については、菅生田遺跡報告書の中でふれられ、この「土器片利用円盤」が、縄文中期大木10式第Ⅱ段階に於いて急激な増加現象が見られ、後期初頭の南境式初期の段階で爆発的に増加し、後期後葉では減少傾向を示すと言う。（丹羽他：1982）

県内の土器片利用円盤を出土した南境期の主な遺跡、菅生田、六反田、山口、中沢、南境、農学寮跡、湯坪等の各遺跡に於ける属性に、ほとんど差は認められない。但し、山口遺跡では出土総数167点中、一孔を有するものが2例含まれている。県内の出土例としては、極めて特異な例と言える。

いわゆる土器片利用円盤や、類似資料は、縄文早期から晩期にいたる、ほぼ全期間を通じて発見される事が知られている。但し、時期によって出土量の多寡や、形態に差異が指摘できる。例えば、縄文早期の出土例として、花山村松ノ原、石巻市南境（楠本：1973）、藏王町明神裏（片倉他：1976）等の各遺跡があるが、松ノ原遺跡例は隅丸方形を呈し、中央に一孔を有するものと有さないものがある。

第2表 土器片利用円盤観察表

N.	測定項目	測定値(例)	平均(cm)	標準偏差(cm)	標準(cm)	重量(g)	測定部位	編 考	測定 者
1	20-7	8.1±3.1±2種	2.43	2.15	0.79	5.1	頭部		赤
2		8-1	2.88	2.48	0.69	5.9	×		赤
3		10-1	2.58	2.35	0.85	5.9	×		赤
4		11-2	2.7	2.35	0.73	5.4	×		赤
5		11-1	(2.41)	(2.3)	0.68	4.9	×		赤
6	22-8	10-1	3.41	2.22	0.72	4.2	×		赤
7	20-12	11-1	2.45	2.28	0.72	4.2	×	○	赤
8		11-1	3.07	2.75	0.77	4.4	×	○	赤
9		11-2	2.83	2.84	0.79	7.5	×		赤
10		11-1	2.18	2.75	0.79	6.7	×		赤
11	20-1	3.15	2.72	0.64	5.9	×			赤
12	20-7	14-11	2.49	2.10	0.83	7.9	×		赤
13	20-7	11-5	2.95	2.92	0.60	6.2	×		赤
14		7-1	3.53	2.56	0.73	7.2	×		赤
15		11-2	3.15	3.05	0.54	6.2	×	○	赤
16		11-1	3.25	3.05	0.69	7.1	×		赤
17		11-8	3.06	2.90	0.80	7.4	×	○	赤
18	2-4	10-1	3.15	3.03	0.81	14.9	×		赤
19		10-1	3.23	2.39	0.71	8.8	×		赤
20	2-3	6-1	3.28	(2.75)	0.71	7.9	×	○	赤
21	20-8	11-1	2.28	2.29	0.78	26.1	×		赤
22	2-2	9-1	3.17	2.95	0.69	6.5	×		赤
23	21-7	6-1	3.45	2.27	0.49	6.9	×		赤
24	21-5	2-1	3.08	2.06	0.21	4.9	×	○	赤
25	20-2	11-1	3.05	3.32	1.56	17.2	×		赤
26	21-8	2-1	3.08	3.26	0.89	32.4	×		赤
27	20-9	1-1	3.00	3.49	0.68	11.9	×		赤
28	20-5	11-1	3.55	12.167	10.721	19.5	×	○	赤
29	21-2	10-1	3.79	3.17	0.56	10.1	×		赤
30		20-1	3.75	3.32	0.86	5.7	×		赤
31	19-7	10-1	3.63	2.57	0.79	11.9	×		赤
32	19-6	10-1	3.92	3.63	0.96	14.5	×		赤
33		7-1	4.03	3.95	0.71	15.0	×	○	赤
34	19-2	11-2	4.73	2.81	0.92	17.4	●	●	赤
35	20-16	11-2	4.29	4.03	0.45	19.0	●	●	赤
36	20-3	11-1	4.13	3.76	0.75	16.9	×		赤
37	19-8	10-2	4.43	4.17	0.79	29.4	×		赤
38	19-4	11-2	4.08	2.96	0.82	27.9	×		赤
39		1-1	4.74	4.64	0.86	22.4	○		赤
40	19-9	11-2	4.07	(1.76)	0.18	29.5	○	○	赤
41	2-2	1-1	4.06	4.41	0.92	20.7	○		赤
42	19-1	1-2	5.05	4.76	0.68	18.4	○		赤
43		10-1	4.72	4.56	0.77	25.7	○		赤
44	19-15	11-2	4.09	4.71	0.83	19.2	●	●	赤
45	20-4	11-2	5.03	4.68	0.66	18.9	●	●	赤
46		11-1	5.03	4.73	0.55	12.9	○		赤
47	12-5	11-2	5.05	5.03	0.35	72.4	○		赤
48	20-1	11-1	5.08	5.31	0.83	38.4	○		赤
49	21-1	9-1	5.82	5.47	0.72	39.4	○		赤
50	22-11	11-1	7.44	7.03	0.60	49.6	●	●	赤

一方、青森県では鈴木克彦氏によって『風韻堂コレクション』の40点が紹介され、併せて、青森県内の該種遺物出土遺跡として、19遺跡が列挙されている。それによると、十腰内式を含む縄文後期遺跡出土のものは、いずれも無孔で、有孔のものは早期、前期、晚期の遺跡から、かなり出土している（鈴木：1981）。

視点を南にすえてみると。茨城県吹上遺跡では、縄文中期～後期初頭の土器とともに、合計37点のいわゆる土器片錐が出土している。形態は、長楕円形又は楕円形、方形、円形に近いもの等があり、加工は、周縁の敲打調整だけのものと、その後に研磨を加えたものがある。相対する長軸線上に切り込みを加えたものが32点あり、出土量の半分を占める。長幅比が3：1にも及ぶ細長いものもある。総じて、土器片利用円盤とは属性が大きく異なる。他に、土器片利用円盤が3点出土している。1例には、中央に一孔がある（宮田編：1977）、埼玉県馬場遺跡では、100点を越す土器片利用円盤が得られている。その内訳は、中期前半：8、同後半：21、後期初頭：1、同中葉：33、同後葉：28点である。他に馬場遺跡からは、楕円形、隅丸方形を呈し、上、下に浅い切り込みを入れた、いわゆる土器片錐も17点出土しており、報告者は、両者が、異なる機能を有するものとしている（町田：1973）。

以上のように、該種資料の類例は、少くとも東北・円、関東地方、北陸地方等に存在するが東北地方では、土器片を整形した後、その長・短軸に切れ込みを入れた、いわゆる土器片錐は顕著でなく、福島県浜通り以南では顕著となるらしい。しかし、関東地方では両者が共存する場合も多いらしく、又、土器片利用円盤の盛期、消長も、東北地方と関東地方では、時期的にズレる場合があるらしい。

土器片利用円盤の用途、機能については、「編物等の錐」説、「土器補修用」説等がある。又、立石遺跡では、同遺跡での膨大な出土量、配石地帯に集中する傾向等から「祭祀具の一種」と推定した。鈴木克彦氏は『風韻堂コレクション』中の有孔製品について考察し、孔に木棒又は、紐を通し、回転や左、右の移動等の運動を行ったものであろうと推定した。しかし、いずれの説も、ある機能の一端を示唆するものではあっても、土器片利用円盤全体の機能を示唆するものとは言い難い。

## (5) 石器

本遺跡出土の石器には、各種のものがある。それらは、大別して、石鏃、小形尖頭器、石匙石錐、搔器、異形石器、不定形石器のような、剝片を素材としたもの—剝片石器、磨製石斧、使途不明石器、石棒等のように、ほぼ、全体を磨いて仕上げたもの—磨製石器、円盤状石器、敲石、凹石、石皿、砾石等のように、素材の形を大きく変えないで、ラフな敲打調整等によつて仕上げたもの—砾石器に区分される。

出土石器の総数は、130点、この内、Bトレンチ出土は107点である。この他、石核、剝片が713点（内、Bトレンチ出土531点）ある。<sup>注3</sup> 例言で述べたが、担当者の不手際で、剝片石器の大半を図示できなかった。又、多量に出土した石核、剝片については、担当者の不勉強と時間的な制約により、不本意ながら今回は、割愛した。尚、図示できなかった石器の一部は、図版に掲載し、以下の類別の中で記述した。

### 石 鏃 第23図1～6

35点出土した。主に基部形態等から、以下のように細分した。

A I類：凹基のもので、側縁が膨むもの。9点出土。巾と長さがほぼ等しいもの（6点）と巾と長さの比が1:1.5に近い、やや長目の尖頭部のもの（3点）がある（第22図4）。身の厚さは、2mm前後がほとんどで、1点のみ5mmのものがある。これは、BT 11区4層から出土した縄文前期後半に伴うものである。

A II類：凹基のもので、側縁がほぼ直線的なもの（第23図1、6）。5点出土。内1点は、剝片の周縁に、ほぼ直角に再調整を加えた所謂剝片鏃である。本例は、左右、対象の側縁を呈する。

B I類：平基のもの。5点出土。基部が平坦で、側縁がやや膨みをもつもの。

B II類：平基のもの。5点出土。基部が平坦で、側縁も比較的、直線的なもの。主要剝離面を大きく残し、大形のものが多い。

C 類：凸基以外で不整形のもの。凹基又は、平基の鏃を意図したと思われる。基部が未調整のものは、未成品の可能性も強い。7点出土（第23図3、5）。

D 類：凸基のものを一括した。8点出土。これには、最大巾:最大長の比が1:1.5以下の巾広のタイプと、1:2に近い、身の長目のタイプがある。前者のタイプは、製作が入念に行われ、身は扁平であるD<sub>1</sub>類（第23図2）。後者には、断面三角形を呈するものD<sub>2</sub>類や、素材の縁辺にのみ、ほぼ直角に近い調整剝離を加えた、いわゆる剝片鏃がある。

石材は、鉄石英、硅質頁岩、玉ズイ等が用いられ、なかでも、鉄石英が21点と、過半数を超える。A I類、D類は、整形及び調整剝離も入念に行われたものが多い。これに対して、B I類、B II類は、調整剝離の粗いものが多い。

第3表 石器のグリット、層位別出土点数

B		C		D		E		F		G		H		I		J		K		L		M		N	
A	1	B	1	C	1	D	1	E	1	F	1	G	1	H	1	I	1	J	1	K	1	L	1	M	1
A-1	2	B-1	2	C-1	2	D-1	2	E-1	2	F-1	2	G-1	2	H-1	2	I-1	2	J-1	2	K-1	2	L-1	2	M-1	2
A-2	3	B-2	3	C-2	3	D-2	3	E-2	3	F-2	3	G-2	3	H-2	3	I-2	3	J-2	3	K-2	3	L-2	3	M-2	3
A-3	4	B-3	4	C-3	4	D-3	4	E-3	4	F-3	4	G-3	4	H-3	4	I-3	4	J-3	4	K-3	4	L-3	4	M-3	4
A-4	5	B-4	5	C-4	5	D-4	5	E-4	5	F-4	5	G-4	5	H-4	5	I-4	5	J-4	5	K-4	5	L-4	5	M-4	5
A-5	6	B-5	6	C-5	6	D-5	6	E-5	6	F-5	6	G-5	6	H-5	6	I-5	6	J-5	6	K-5	6	L-5	6	M-5	6
A-6	7	B-6	7	C-6	7	D-6	7	E-6	7	F-6	7	G-6	7	H-6	7	I-6	7	J-6	7	K-6	7	L-6	7	M-6	7
A-7	8	B-7	8	C-7	8	D-7	8	E-7	8	F-7	8	G-7	8	H-7	8	I-7	8	J-7	8	K-7	8	L-7	8	M-7	8
A-8	9	B-8	9	C-8	9	D-8	9	E-8	9	F-8	9	G-8	9	H-8	9	I-8	9	J-8	9	K-8	9	L-8	9	M-8	9
A-9	10	B-9	10	C-9	10	D-9	10	E-9	10	F-9	10	G-9	10	H-9	10	I-9	10	J-9	10	K-9	10	L-9	10	M-9	10
A-10	11	B-10	11	C-10	11	D-10	11	E-10	11	F-10	11	G-10	11	H-10	11	I-10	11	J-10	11	K-10	11	L-10	11	M-10	11
A-11	12	B-11	12	C-11	12	D-11	12	E-11	12	F-11	12	G-11	12	H-11	12	I-11	12	J-11	12	K-11	12	L-11	12	M-11	12
A-12	13	B-12	13	C-12	13	D-12	13	E-12	13	F-12	13	G-12	13	H-12	13	I-12	13	J-12	13	K-12	13	L-12	13	M-12	13
A-13	14	B-13	14	C-13	14	D-13	14	E-13	14	F-13	14	G-13	14	H-13	14	I-13	14	J-13	14	K-13	14	L-13	14	M-13	14
A-14	15	B-14	15	C-14	15	D-14	15	E-14	15	F-14	15	G-14	15	H-14	15	I-14	15	J-14	15	K-14	15	L-14	15	M-14	15
A-15	16	B-15	16	C-15	16	D-15	16	E-15	16	F-15	16	G-15	16	H-15	16	I-15	16	J-15	16	K-15	16	L-15	16	M-15	16
A-16	17	B-16	17	C-16	17	D-16	17	E-16	17	F-16	17	G-16	17	H-16	17	I-16	17	J-16	17	K-16	17	L-16	17	M-16	17
A-17	18	B-17	18	C-17	18	D-17	18	E-17	18	F-17	18	G-17	18	H-17	18	I-17	18	J-17	18	K-17	18	L-17	18	M-17	18
A-18	19	B-18	19	C-18	19	D-18	19	E-18	19	F-18	19	G-18	19	H-18	19	I-18	19	J-18	19	K-18	19	L-18	19	M-18	19
A-19	20	B-19	20	C-19	20	D-19	20	E-19	20	F-19	20	G-19	20	H-19	20	I-19	20	J-19	20	K-19	20	L-19	20	M-19	20
A-20	21	B-20	21	C-20	21	D-20	21	E-20	21	F-20	21	G-20	21	H-20	21	I-20	21	J-20	21	K-20	21	L-20	21	M-20	21
A-21	22	B-21	22	C-21	22	D-21	22	E-21	22	F-21	22	G-21	22	H-21	22	I-21	22	J-21	22	K-21	22	L-21	22	M-21	22
A-22	23	B-22	23	C-22	23	D-22	23	E-22	23	F-22	23	G-22	23	H-22	23	I-22	23	J-22	23	K-22	23	L-22	23	M-22	23
A-23	24	B-23	24	C-23	24	D-23	24	E-23	24	F-23	24	G-23	24	H-23	24	I-23	24	J-23	24	K-23	24	L-23	24	M-23	24
A-24	25	B-24	25	C-24	25	D-24	25	E-24	25	F-24	25	G-24	25	H-24	25	I-24	25	J-24	25	K-24	25	L-24	25	M-24	25
A-25	26	B-25	26	C-25	26	D-25	26	E-25	26	F-25	26	G-25	26	H-25	26	I-25	26	J-25	26	K-25	26	L-25	26	M-25	26
A-26	27	B-26	27	C-26	27	D-26	27	E-26	27	F-26	27	G-26	27	H-26	27	I-26	27	J-26	27	K-26	27	L-26	27	M-26	27
A-27	28	B-27	28	C-27	28	D-27	28	E-27	28	F-27	28	G-27	28	H-27	28	I-27	28	J-27	28	K-27	28	L-27	28	M-27	28
A-28	29	B-28	29	C-28	29	D-28	29	E-28	29	F-28	29	G-28	29	H-28	29	I-28	29	J-28	29	K-28	29	L-28	29	M-28	29
A-29	30	B-29	30	C-29	30	D-29	30	E-29	30	F-29	30	G-29	30	H-29	30	I-29	30	J-29	30	K-29	30	L-29	30	M-29	30
A-30	31	B-30	31	C-30	31	D-30	31	E-30	31	F-30	31	G-30	31	H-30	31	I-30	31	J-30	31	K-30	31	L-30	31	M-30	31
A-31	32	B-31	32	C-31	32	D-31	32	E-31	32	F-31	32	G-31	32	H-31	32	I-31	32	J-31	32	K-31	32	L-31	32	M-31	32
A-32	33	B-32	33	C-32	33	D-32	33	E-32	33	F-32	33	G-32	33	H-32	33	I-32	33	J-32	33	K-32	33	L-32	33	M-32	33
A-33	34	B-33	34	C-33	34	D-33	34	E-33	34	F-33	34	G-33	34	H-33	34	I-33	34	J-33	34	K-33	34	L-33	34	M-33	34
A-34	35	B-34	35	C-34	35	D-34	35	E-34	35	F-34	35	G-34	35	H-34	35	I-34	35	J-34	35	K-34	35	L-34	35	M-34	35
A-35	36	B-35	36	C-35	36	D-35	36	E-35	36	F-35	36	G-35	36	H-35	36	I-35	36	J-35	36	K-35	36	L-35	36	M-35	36
A-36	37	B-36	37	C-36	37	D-36	37	E-36	37	F-36	37	G-36	37	H-36	37	I-36	37	J-36	37	K-36	37	L-36	37	M-36	37
A-37	38	B-37	38	C-37	38	D-37	38	E-37	38	F-37	38	G-37	38	H-37	38	I-37	38	J-37	38	K-37	38	L-37	38	M-37	38
A-38	39	B-38	39	C-38	39	D-38	39	E-38	39	F-38	39	G-38	39	H-38	39	I-38	39	J-38	39	K-38	39	L-38	39	M-38	39
A-39	40	B-39	40	C-39	40	D-39	40	E-39	40	F-39	40	G-39	40	H-39	40	I-39	40	J-39	40	K-39	40	L-39	40	M-39	40
A-40	41	B-40	41	C-40	41	D-40	41	E-40	41	F-40	41	G-40	41	H-40	41	I-40	41	J-40	41	K-40	41	L-40	41	M-40	41
A-41	42	B-41	42	C-41	42	D-41	42	E-41	42	F-41	42	G-41	42	H-41	42	I-41	42	J-41	42	K-41	42	L-41	42	M-41	42
A-42	43	B-42	43	C-42	43	D-42	43	E-42	43	F-42	43	G-42	43	H-42	43	I-42	43	J-42	43	K-42	43	L-42	43	M-42	43
A-43	44	B-43	44	C-43	44	D-43	44	E-43	44	F-43	44	G-43	44	H-43	44	I-43	44	J-43	44	K-43	44	L-43	44	M-43	44
A-44	45	B-44	45	C-44	45	D-44	45	E-44	45	F-44	45	G-44	45	H-44	45	I-44	45	J-44	45	K-44	45	L-44	45	M-44	45
A-45	46	B-45	46	C-45	46	D-45	46	E-45	46	F-45	46	G-45	46	H-45	46	I-45	46	J-45	46	K-45	46	L-45	46	M-45	46
A-46	47	B-46	47	C-46	47	D-46	47	E-46	47	F-46	47	G-46	47	H-46	47	I-46	47	J-46	47	K-46	47	L-46	47	M-46	47
A-47	48	B-47	48	C-47	48	D-47	48	E-47	48	F-47	48	G-47	48	H-47	48	I-47	48	J-47	48	K-47	48	L-47	48	M-47	48
A-48	49	B-48	49	C-48	49	D-48	49	E-48	49	F-48	49	G-48	49	H-48	49	I-48	49	J-48	49	K-48	49	L-48	49	M-48	49
A-49	50	B-49	50	C-49	50	D-49	50	E-49	50	F-49	50	G-49	50	H-49	50	I-49	50	J-49	50	K-49	50	L-49	50	M-49	50
A-50	51	B-50	51	C-50	51	D-50	51	E-50	51	F-50	51	G-50	51	H-50	51	I-50	51	J-50	51	K-50	51	L-50	51	M-50	51
A-51	52	B-51	52	C-51	52	D-51	52	E-51	52	F-51	52	G-51	52	H-51	52	I-51	52	J-51	52	K-51	52	L-51	52	M-51	52
A-52	53	B-52	53	C-52	53	D-52	53	E-52	53	F-52	53	G-52	53	H-52	53	I-52	53	J-52	53	K-52	53	L-52	53	M-52	53
A-53	54	B-53	54	C-53	54	D-53	54	E-53	54	F-53	54	G-53	54	H-53	54	I-53	54	J-53	54	K-53	54	L-53	54	M-53	54
A-54	55	B-54	55	C-54	55	D-54	55	E-54	55	F-54	55	G-54	55	H-54	55	I-54	55	J-54	55	K-54	55	L-54	55	M-54	55
A-55	56	B-55	56	C-55	56	D-55	56	E-55	56	F-55	56	G-55	56	H-55	56	I-55	56	J-55	56	K-55	56	L-55	56	M-55	56
A-56	57	B-56	57	C-56	57	D-56	57	E-56	57	F-56	57	G-56	57	H-56	57	I-56	57	J-56	57	K-56	57	L-56	57	M-56	57
A-57	58	B-57	58	C-57	58	D-57	58	E-57	58	F-57	58	G-57	58	H-57	58	I-57	58	J-57	58	K-57	58	L-57	58	M-57	58
A-58	59	B-58	59	C-58	59	D-58	59	E-58	59	F-58	59	G-58	59	H-58	59	I-58	59	J-58	59	K-58	59	L-58	59	M-58	59
A-59	60	B-59	60	C-59	60	D-59	60	E-59	60	F-59	60	G-59	60	H-59	60	I-59	60	J-59	60	K-59	60	L-59	60	M-59	60
A-60	61	B-60	61	C-60	61																				

### 小形尖頭器 第23図8~10 図版17--7~13

8点出土。2×3cm前後の、尖頭部を有する石器を一括した。石錐に比べて部厚く、幅広い。基部が丸くおさまるもの：a類（第23図9）と、基部が、ほとんど未調整のもの：b類（第23図8、10）があり、後者が多い。後者は、特に、尖頭部を意識的に製作している。

### 石匙 第23図15

縦長剥片の背面に調整剝離を行い、一方につまみを有するもの。先端部の打面が未調整のまま残されている。

### 石錐 第23図12、第24図1、図版17~20~25、図版18~16

BTから4点出土した。他に、AT4区から2点出土した。これを加えて記述する。

A類：ほぼ、方形に整形された大形扁平な素材を使用するもの。錐部断面は、扁平な菱形を呈する（図版17~24、18~16）。

B類：不定形の、やや部厚な素材を用い、A類より長い錐部をもつもの。石質は、いずれも玉ズイ質である。錐部断面は、三角形、菱形、不整方形を呈する。尚、第24図1は、ノッチドスクレーパーの機能を兼ねた可能性もある。

### 円形搔器 第24図2、3

2点出土。ともに、径3cm未満の略円形に整形し、周縁に二次加工を行っている。いずれも打面を残すが、(3)は、打面側の一側縁に二次調整を加えただけで、ラフなつくりである。(2)は背面のほぼ全周に、入念な調整を行っている。先端部の刃角は、90°前後である。

### 異形石器 第23図11

a面右側縁は直線的に、左側縁下半部を弧状に整形したもので、現代の「つのベラ」を小形にしたような形状を呈する。調整は、a、b両面とも、入念に行われており、b面の一部に、ピッチ状物質の痕跡が、かすかに認められる。

### 不定形石器 第23図6・9・10・14、第24図5・7・8・11・12、図版17~14

図版18~1~3~5~15

45点出土。BT出土剥片石器の、約半数を占める。剝面の一辺、又は多辺に再調整を加えたもので、これまでの分類に含まれないものを一括した。これを、その形状、打面の有無、調整の様態等から、以下のように5類11種に分類した。

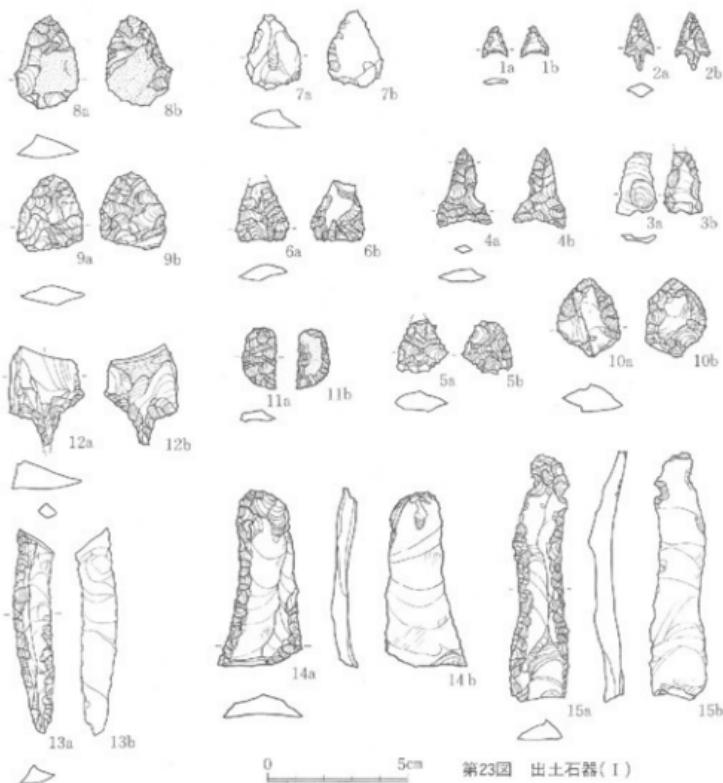
[A類] 打面を残し、縦長剥片を用いたもの。

AⅠ類：背面二辺調整のもの（第23図14、図版18~1~3）。

AⅡ類：背面一辺調整のもの（図版18~5）。

AⅢ類：背面、腹面各一辺調整のもの（第24図8、図版18~7）。

AⅣ類：腹面二辺調整のもの（図版18~6）。



第23図 出土石器(Ⅰ)

石器観察表

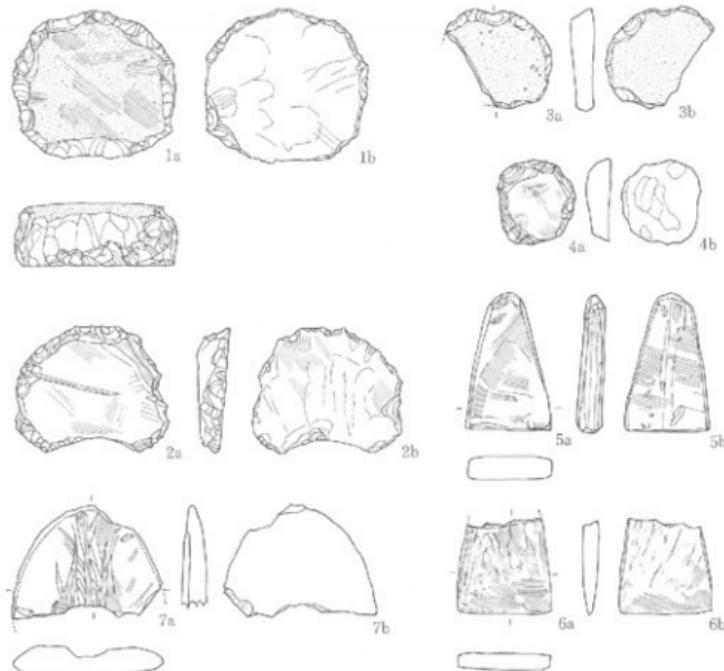
番号	種別	出土場所層	石種	成形法	打削部位	磨削部	復元調査	備考
1	石鏟	II B 1-1 層	鈍石英	実	打削除去	全体	全体	
2	石鏟	II B 6-3	鈍石英	実	*		全体	
3	石鏟?	II B 10-1	鈍石英質	先	打削痕	全体	無調査	
4	石鏟	II B 11-1	玉大イト	実	打削除去	全体	全体	
5	石鏟	II B 9-7	鈍石英	先	*	全体	ほぼ全体	
6	石鏟	II B 10-1	鈍石英	先	痕	*	全体	
7	小形尖頭器	II B 10-1	鈍石英	定	*	二端の一割	一端の一端	
8	小形尖頭器	II B 11-3	鈍石英	定	*	二端の一部	二端	表面に自然面を残す
9	小形尖頭器	II B 11-3	鈍石英	定	*	全体	全体	
10	小形尖頭器	II B 10-1	鈍石英	定	打削痕	二端	全体	
11	尖形石器	II B 10-3	鈍石英	定	打削除去	全体	全体	
12	石鏟	II B 10-1	鈍石英質	先	打削痕	二端	二端	
13	不定形石器	II B 10-2	鈍石英岩	定	打削除去	二端	打削痕	C-II類
14	不定形石器	II B 10-2	鈍石英岩	定	打削痕	二端	打削痕	A-I類
15	石鏟	II B 10-4	鈍石英岩	定	*	全体	一端	



第24図 出土石器(II)

石器観察表

番号	種類	出土地名層位	石種	断面形	有刃部形	背面調節	侧面調整	商名
1	石器	新井3-1層	玉木石	先端	粗面丸	全 体	細調整	津村利治氏三角形
2	円形石器	新井3-1	純質石英	先	粗面丸	全 体	細調整	
3	円形石器	新井2-1	純質石英	先	粗面丸	一 面	一 面	
4	不定形石器	新井1-4	純質石英	不明	不明	二 面	一部	
5	不定形石器	新井1-2	不明	先	粗面丸	全 体	一 面	日鏡
6	不定形石器	新井1-1	純質石英	先	粗面丸	全 体	細調整	C-日鏡
7	不定形石器	新井1-1	純質石英	先	粗面丸	二 面	一 面	C-日鏡
8	不定形石器	新井10-2	純質燧石灰岩	先	粗面丸	一 面	一 面	A-日鏡
9	不定形石器	新井11-1	石英岩	先	粗面丸	一 面	細調整	B-日鏡
10	不定形石器	新井11-1	純質石英	先	粗面丸	一 面	細調整	B-日鏡
11	不定形石器	新井11-1	石英岩	先	粗面丸	二 面	一 面	日鏡
12	不定形石器	新井11-1	純質石英	先	粗面丸	二 面	細調整	B-日鏡、一部調整



第25図 出土石器(III)

第25図、第26図、第27図石器観察表

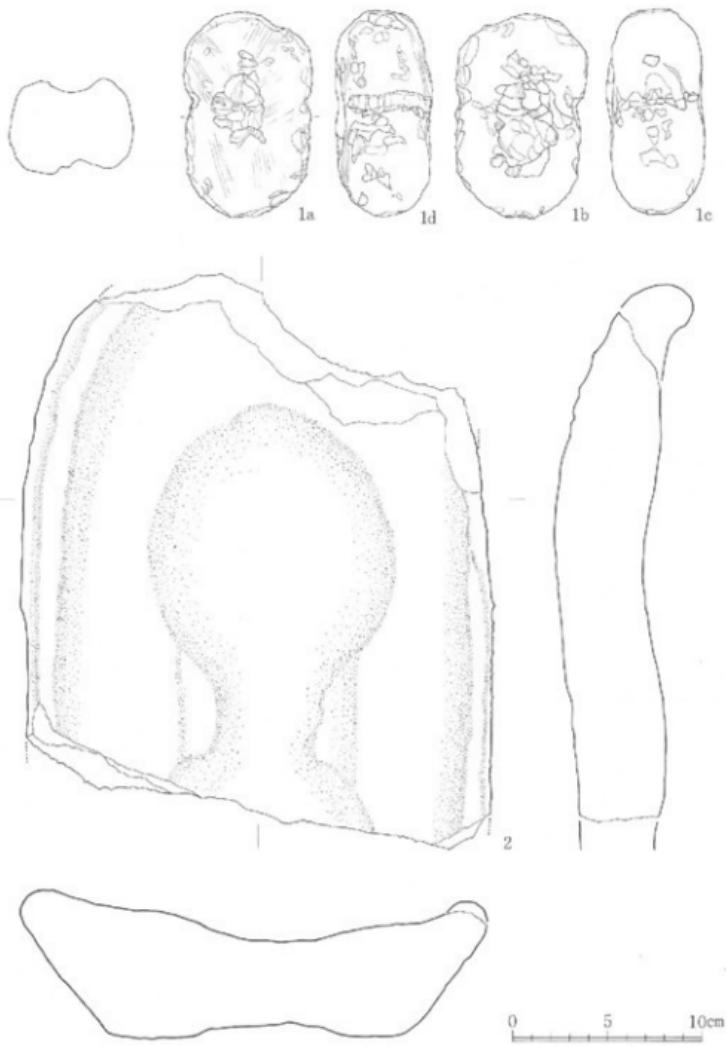
区 分	種 别	出土地点層位	石 材	成形様	備 考
第25図 1	円盤状石器	日吉10-1層	斜壁變山岩	尖	底部でより刃角が大きい。
2	円盤状石器	日吉10-1層	變山岩	下 鋸	底部でより刃角が小さい。下部断面後方も使用
3	円盤状石器	日吉9-1層	變山岩	上 下鋸	底部でより刃角が大きい。
4	円盤状石器	日吉10-1	變山岩	尖	底部でより刃角が大きい。背面の一部、復面は磨製
5	手取状石器	日吉6-1	變山岩	尖	磨製、石材は6に冠するが生産は刃部を形成しない
6	磨製石器	日吉10-2	變山岩	基 部	5と同一石材と思われる
7	船石	日吉11-1	變山岩	半 尖	

第26図 1	石斧	日吉4-1	粘板岩	一部丸在	敲打清製、下面を凸凹化している
2	石錐	日吉10-1			一側丸在、両肩も角形、刃利化している
3	鍬形	日吉11-1	砂岩	鋸 面	一部に新鮮削面あり、石斧等、磨石等に利用か
4	研削石斧	日吉11-1	粘板岩	鋸 面	前部断面後方も使用
5	磨製石斧	日吉11-1	變山岩	鋸 面	X25
6	磨製石斧	日吉11-2	變山岩	鋸 面	
7	石錐	日吉10-1	安山岩	尖	
8	石錐	日吉8-1		一部丸在	

第27図 1	石器	日吉13-2	安山岩	尖	剥離面にも附る
2	石錐	日吉10-1		丸欠損	鋸付



第26図 出土石器(IV)



第27図 出土石器(Ⅳ)

(B類) 打面を残し、横長剣片を用いたもの。

BⅠ類：背面一辺調整のもの。これには、比較的、薄手で調整が入念に行われるものと、ラフな調整のもの（第23図9・10）がある。

BⅡ類：原石面を残す背面の複辺に、ラフな調整を行ったもの。調整後、2辺を磨いている（第24図12）。

BⅢ類：腹面三辺調整のもの（第5図4）。背面は平滑で、凸面状の腹面の三辺に調整を加えている。

(C類) 縦長剣片を用い、打面を除去したもの。

CⅠ類：背面、腹面のほぼ全周に、ラフな調整を加えたもの。小形尖頭器と似るが、尖頭部を作出しない（図版17—14）。

CⅡ類：背面の二辺以上調整のもの。一方が尖るもの（第22図13）と、平坦におさまるもの（第23図6）がある。

CⅢ類：背面の一辺に調整を加えたもの。

CⅣ類：a面の2辺とb面一辺に調整を加えたもの（第24図7）。これは上方がヒンジフランチャード面をなし、下方にも切断後の調整が及ぶ点から、破損品ではない。

(D類) 横長剣片を用い、打面を除去したもの、又は認められないもの。腹面、背面の一部に、ラフな調整が加えられる（第24図5・11）。

(E類) 以上の類別に含まれないもの。破損等により、同定の不可能なもの等を一括した。前者には、剣片の一辺の一部に、ラフな調整を加えたものが多い。

#### 磨製石斧 第25図6、第26図4～6

4点出土した。いずれも破損品である。第25図6は、頭部が欠損しているが、頭部から刃部にかけて、直線的に広がるものであろう。刃部の平面形は直線的で、基部の横断面は、扁平な長方形である。仕上げの際の擦痕が、基部では縦又は斜位に、刃部では横又は斜位に認められる。第26図5・6は、ともに刃部側面を欠損しているが、平面形は、頭部から刃部に向ってひろがるもので、基部横断面は、中央で膨みを有する長方形を呈し、(6)は特に膨みが強い。第26図4は、頭部側面を欠損している。B面頭部の敲打痕は、頭部欠損後のものであり、破損後も、再使用された事が知られる。基部横断面は、膨みをもつ長方形であるが、4辺の際は、前2者より不明瞭である。刃部平面形は、外彫り、僅かに刃こぼれが認められる。

#### 使途不明石器 第25図5

平面形は、二等辺三角形を呈し、縦、横断面ともに扁平な長方形を呈する。部分的に、仕上げの際の擦痕が認められる。本例は、大きさ、形態、仕上げ、石質等の点で、第25図6と近似するが、前者が刃部を形成するのに対し、本例は刃部を形成しない点で大きく異なる。但し、両

例ともに凝灰質砂岩という軟質の石材を用いている点から、非実用的な用途をもつものと考えられる。

#### 石 棒 第26図1

直径3cm前後の、横断面が円形を呈する石棒断片である。敲打によって、かなり入念に整形されているが、折損後、更に半載して再利用された事が、半載断面に残る線条痕、先端部に残る極度の使用痕等によって、うかがう事ができる。

#### 円 盤 状 石 器 第25図1～4

扁平な礎の周辺を打欠いて、ほぼ円形に仕上げたもの。

A類：部厚な素材の全周に、ラフな打欠きを加えたもの。横断面は長方形に近い（第25図1）。

B類：薄手扁平の素材の全周又は一部に、調整を加えたもの。刃角はA類より小さく、50°前後。いずれも軟質の石材を用いている（第25図2～4）。

A、B類ともに、b面の平滑面が要求されたと考えられ、特に(4)は、面の一部を磨いて仕上げている。

#### 敲 石 第26図2

横断面形が5角形を呈する、いわゆる特殊磨石の破片である。整形は、敲打調整によって、かなり入念に行われ、部分的に擦って仕上げている。形態は特殊磨石であるが、b面中央に敲石に見られると同様の敲打痕が認められる。この事から、本例は磨石、敲石等に多目的に使用されたものであろう。

#### 凹 石 第26図7、第27図1

2点出土した。

A類：ほぼ円形の礎の、表・裏・中央部に、1～2個の凹みを有するもの。凹みの周辺の一部分に磨面が認められる（第26図7）。

B類：橢円形の礎を素材とし、表・裏・側面にまで凹みが見られるもの。凹みは、a、b面とともに、密集して多数見られ、更にc、d面にも及ぶ。c、b面のほぼ中央部に、併行する凹み列が印象的である。（第27図1）。

#### 石 皿 第26図8、第27図2

A類：脚を有さないもの。少しだけ残存しないため、平面形は不明であるが、中央は皿状に凹み、周囲を取り囲むように、縁が作り出されている（第26図8）。

B類：脚を有するもの。平面形は、残存部の状況から長卵形になると思われる。周囲は、A類同様、やや高い縁を作り出している。皿の部分は、中央に、更にほぼ円形の凹みが2個連結して見られ、皿部は2段となっている。内側の凹みの周囲には、磨面が認められる。脚は、

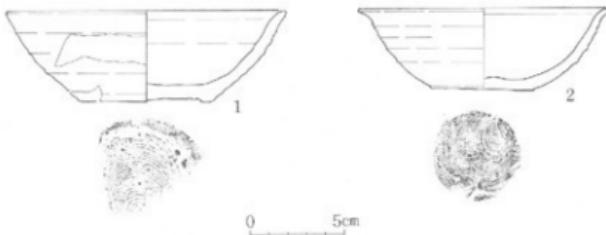
2個現存するが、本来3個であったかどうかは不明。石質は、溶岩?で極めてもらい。

礫 器 第26図3

上部を欠損しているが、横断面形は楕円形を呈する。先端部に、極度の使用痕が認められる。又、B面中央に凹み、又は敲打痕が認められる。この事から、石斧、凹石、敲石等として多目的に利用されたものであろう。

砥 石 第25図7

扁平な自然礫のほぼ中央に、細い線状の凹み（磨溝）が見られるもの。かなり、使いこまれており、中央部では元の $\frac{1}{2}$ の厚さになっている。磨溝は、平行して無数に見られる。



第28図 赤焼土器

(註)

- 1) 第二、第三土器の分類は第一土器に順じ、第一土器に該当するものが無い場合、第一土器に連続して追加設定した。
- 2) 本例と同様の特徴を有するものが、もう1点存在する。（第8図25）がそれで、ともに小破片で磨滅が著しく、地文等の有無は不明である。近接の竹の花遺跡（本書図版21-18）でも出土している。隆線をヨコ又はナナメの刻目によって切る手法は、大木10式最終段階の土器に頗著に見られる。室須遺跡の分類では、隆線を有する点から1群に含まれるが、本文中の分類とは別に1群0類としておく。
- 3) 刺片等で特に注目されるのは、石材が鉄石英に偏向する点である。鉄石英とそれ以外の石材の出土点数をトレンド別に示すと、Aトレンド=55:7、Bトレンド=448:83、Cトレンド=103:17となる。鉄石英の原石は10点出土したが、いずれも直徑4~5cmの転石である。鉄石英以外では、真岩、黒曜石等がある。
- 4) 後藤勝彦氏の教示によると、本例に近似したものは、石巻市南境貝塚で縄文後期前垂の土器とともに多量に出土したと言う。

## IV. 繩文後期土器について

### 1. 出出土器の類別

出土土器を5群に大別し、更に類、種に細別した。これを整理して、土器の特徴が把握できるものを類似化すると、次のようになろう。

I群 口縁部及び体部文様帶に隆線文が加わるもの。隆線文は、一部、連鎖状隆線をなす場合が多く、ボタン状貼付文等を有するものも含む。体部文様帶は、方形を基調とする磨消繩文帶によって構成される場合が多く、区画文として連鎖状隆線文が多く用いられる。I群Ⅰ—a～b、I群Ⅱ—a～b。

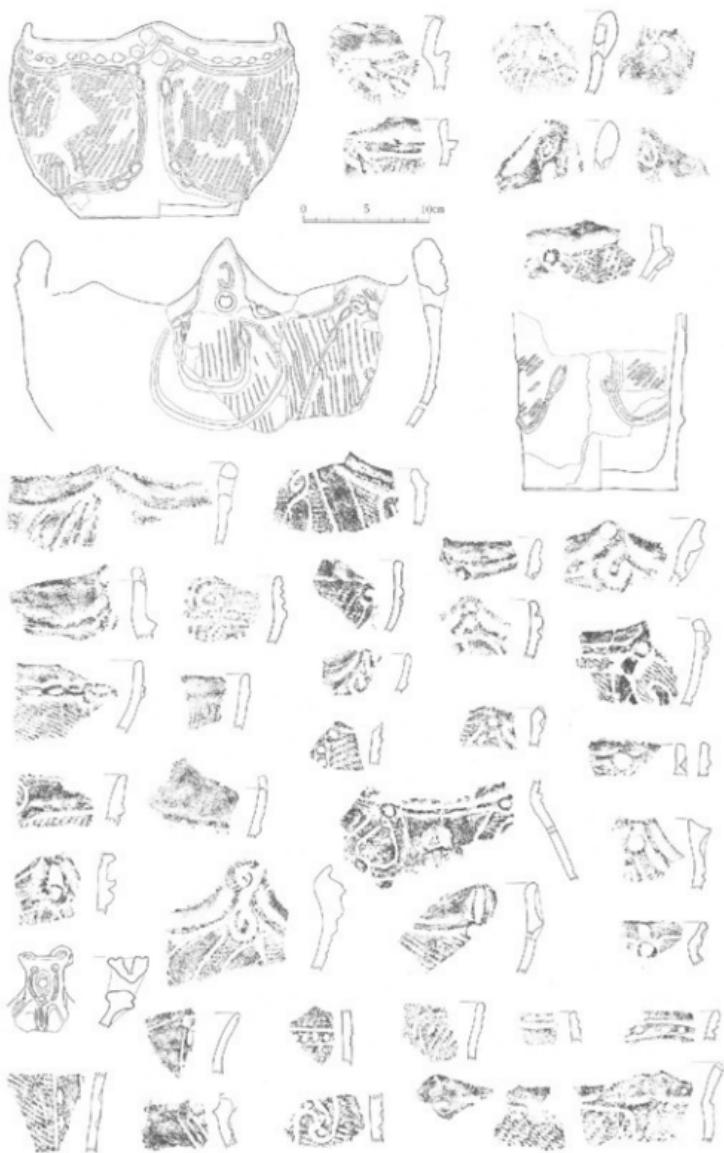
II群 口縁部が極端に肥厚、又は口縁内、外面に陵線、沈溝を形成するもの。口縁部には太い沈線による縦位の孤状文等を描き、独立した口縁部文様帶をもつ。この場合、口縁及び頸部には、通常、地文をもたない。I群Ⅲ—a、b、E。

III群 口縁は大ぶりな4個の波状口縁をなすものが多く、肥厚、突起等の変化に乏しい。文様帶は、口縁から体部にかけて一体化し、磨消繩文(捺糸文)が顕著なもの。磨消繩文のモチーフは、沼津貝塚(三塚、阿部、佐藤:1976、18・19図)、貝鳥貝塚(高橋、小田野、熊谷:1982、PL42)等に見るような、口縁下に三角形状のモチーフを間隔を開けて配し、その中間から下垂する倒卵状又は、逆ハート状のモチーフを配するのが基本的な構図と思われる。文様帶の始、起点には、沈線による渦巻、S字状、鉤状文等がアクセントとして付けられる場合が多い。磨消帶による鉤状文をもつものもある。磨消繩文帶中に縦位のジグザグ文や連続「8」字状文等の施文されるものは、他遺跡の例から見て、V群に含まれる公算も強いが、一応、本群に含めた。宝鏡遺跡出土土器の過半数を占める。2群Ⅰ、Ⅲ—a～E、K。

IV群 磨消繩文帶の区画文、又は平行線間の充填文として連続刺突文が用いられるもの。前者では、磨消繩文を区画する沈線文に附随して、後者では、口縁部文様帶を形成する場合と体部に繩文を施文した後、沈線文による文様帶内部に施文される場合がある。2群Ⅱ—a、a<sup>2</sup>、b、c<sup>2</sup>。

V群 3群Ⅰ・Ⅱ類土器は、2区と4区にやや集中して検出された以外、他区では、ほとんど検出されない。従って、第一・第二土器に本来的に包抱されるものではないと考えられる。土器の特徴は、横又は縦位の孤文、直線文等を2条以上の平行線で描く事にある。この場合、繩文等の地文が加わるものと加わらない場合がある。前者では、沈線間が磨消される場合がある。

VI群 入念にミガキ調整された器面に、2条の平行する沈線によって、曲線的なモチーフ



第29図 A グループの土器

が描かれるもので、第三十器中に1個体のみ、認められた。2群IV-c類。

## 2. 類別土器と各遺跡出土土器との対比

次に、宝領遺跡で認められた、I～VI群のグループに対比される宮城県内、及び岩手県南部の後期前葉の土器群との対比を行<sup>(註1)</sup>う。

I群に対比されるものに、崎山弁天遺跡IV群1類、2類土器の一部、門前貝塚(Y)2類a～d、門前貝塚(O)II群1、2類上器の一部、八犬遺跡II群8類、III群1類、貝鳥貝塚II群1類古館貝塚、青島貝塚11類の一部、青木畠遺跡、元木遺跡(伊東他:1982、70-1)、金取遺跡2群ID1a口・ハ、六反田遺跡3類土器等がある。又、南境貝塚(G)1群1・2類土器も、本遺跡の1群2b類に近似するので本群に含められよう。尚、県南の二屋敷遺跡(片倉、中橋、後藤:1976、P409-5)でも類似例があるが、確認していない。以上のように本群の分布は、岩手県南部から宮城県中央部に及ぶ事が推定されており、一般に門前式の名で呼ばれている。

II群に対比されるものに、崎山弁天遺跡IV群3類(図48-23)、貝鳥貝塚II群3類の一部、南境貝塚(G)第三群、金取遺跡2群(浅鉢)、山口遺跡、農学寮跡遺跡IB1a等の各土器群がある。仙台平野以北では、本群を主体的に出土する遺跡は少く、上記各遺跡における出現比率も低い。但し、宝領遺跡1群IIIa類に類似する例は、網取II式や堀ノ内I式に散見される。

III群に対比されるものは、門前貝塚(Y)cの一部(第8図3)、門前貝塚(O)II群3類B、八犬遺跡III群3類・4類の一部、貝鳥貝塚II群2類、青島貝塚11類、南境貝塚(G)第二群4～6類、沼津貝塚(三塚、阿部、佐藤:1976、第18・19図版)、金取遺跡IB1b類、湯坪遺跡(第12図1と2群I類)等の各土器群がある。主に、岩手県南部から宮城県中央部にかけて分布するが、岩手県北部や山形県庄内地方にも類似例が確認されている。分布域は、I群のそれに近い。各遺跡における本群土器の出現比率はかなり高い場合が多く、宝領遺跡もその例外ではない。本群土器は、内容がやや豊富な事から、一部で細分の試みがなされている(後藤:1974)。確かに、各遺跡の資料欄には、相当のバリエーションが認められる。例えば、貝鳥貝塚(高橋、小出野、熊谷:1982、PL42、1～3、PL43・1～4)では、鈎状の磨消帯が口縁～体部文様帶の主体となり、その対置、連続する等、変化したものが沼津貝塚に見るような、三角形と倒卵状の反復文様帶に変容するものと考えられる。貝鳥貝塚では、鈎状文の基点に継位の連続して1～3個の盲孔がつけられるが、これは、I群及び併行する土器群に多用される、ボタン状貼付文の退化したものと見られ、更には、本群土器の文様帶の起点、中間点に多用される渦巻、S字状、鉤状等の沈線文様に変化するものと考えられる。磨消帯による鈎状文は、網取貝塚、大畑貝塚出土のいわゆる網取I式にも、隆線文、隆沈線文のモチーフとして見られ、その派生が関東地方の称名寺式にまでたどれる。



第30図 B グループの土器

宮城県中央部の、湯坪遺跡、山形県神矢田遺跡(後藤:1981)、岩手県卯遠坂遺跡(高橋、小田野、熊谷:1982)等、Ⅳ群土器の分布の中心から外れた地域では、かなり、変容した姿相を呈するらしい。

Ⅳ群土器に対比されるものに、崎山弁天遺跡(第46図9)、門前貝塚(Y)(11図61)、青木畠遺跡EⅡb類、南境貝塚(伊東他:1981、P70-2、4)等がある。本群土器の公表された類例は出土遺跡、出土遺物とともに少く、普遍的な存在ではないらしい。後述するように、青木畠遺跡では宝鏡遺跡Ⅰ群土器とほぼ共伴することが知られている。

V群土器に対比されるものは、門前貝塚(Y)3類、八天遺跡Ⅲ群6類、貝鳥貝塚Ⅱ群3類、青島貝塚11類の一部(図24-12、13)、南境貝塚(G)第三群、金取遺跡2群、胴部資料e?、湯坪遺跡A-4、山口遺跡第VI群、二尾敷遺跡(片倉、中橋、後藤:1976、P71・72)等の各土器群がある。

本群土器は、微少な資料をもとに分類を行ったが、上記各遺跡出土土器からその内容を把握すると、口縁上部の突堤上の盲孔間を、太い沈線で縫なぐ等の口縁部文様帶が存在し、以下に縄文を地文とし、3~5条前後の複線によって、孤文・縦位直線文、8の字状文等を描くのが一般的である。網取Ⅱ式を媒体として、堀ノ内Ⅰ式と密接に関連するグループである。本群土器は、宮城県南部以南に主体的に存在する。又、上記各遺跡では、Ⅱ群七器と共に伴する場合が多い。

Ⅵ群土器に対比されるものは、立石遺跡Ⅴ群5類A、門前貝塚(O)Ⅱ群4類、南境貝塚(伊東他:1982、P73-2)等の各土器群がある。本遺跡では、I~V群土器と地点を異にして1個体検出されたにすぎず、客体的な土器と言えよう。本群土器は、東北北部に濃密に分布し、古く大湯式と呼称され、近年では十腰内Ⅰ式(今井、磯崎:1969)と呼称されている七器群に包抱される。但し、成田氏(成田:1981)によると、文様帶が口縁部と体部に分離する点、体部文様帶が複雜である点、沈線が半肉彫に近い点等から、前十腰内Ⅰ式とされたものに近い。前十腰内Ⅰ式には、口縁部に隆線文やボタン状貼付文が見られるが、東北南部の土器群と共通する文様要素である。

さて、宝鏡遺跡出土I~VI群土器と、他遺跡との対比を行った。この対比の過程で、I群とIV群、II群とV群がそれぞれ、同一のグループに属する事が判明した。以下において、I群とVI群をAグループ、III群をBグループ、II群とV群をCグループ、VI群をDグループの土器とそれぞれ呼称する。

以上に、繁雑なまでに土器の分類、類別、グルーピングを行った。以上の関係を第4表にまとめた。

第4表

分類	類別	グループ	分類	類別	グループ
1群0類	I群		2群III群		
I群Ia	I群	Aグループ		g	
b	I群	Aタ		h	
c	I群	Aタ		i	
d	I群	Aタ		J	
e	I群	Aタ		k	III群 Bグループ
IIa	I群	Aタ		IVa	
b	I群	Aタ		b	
c				c	IV群 Dグループ
IIIa	II群	Cグループ	3群I	V*	Cグループ
b	II群	Cタ		V*	Cタ
c	II群	Cタ		III	
e	II群	Cタ	4群Ia		
2群I	III群	Bグループ		b<1	
IIa	IV群	Aタ		II	
b	IV群	Aタ		IIIa	
c	IV群	Aタ		b	
IIIa	III群	Bタ	5群I		
b	III群	Bタ		II	
c	III群	Bタ		III	
d	III群	Bタ			
e	III群	Bタ			

### 3. 宝領遺跡の地域性

次に、宝領遺跡に近接する、ほぼ同時代の遺跡との比較を行う。ここでは、至近に所在する青木畠遺跡と、北上川中流部の青島、貝鳥両貝塚を対象とした。

**青木畠遺跡** 宝領遺跡の南東約1.2kmの地点、一迫川によって形成された自然堤防上に立地する。昭和47年、県文化財保護課によって調査が行われた。調査は、弥生時代の遺物包含層を中心に行われ、範囲確認の為のトレンチから繩文後期初頭の遺物が一括出土した。出土土器は量的に多くないが、ほぼ、單一な様相を呈する土器群として興味深い。

両遺跡で共通する文様構成は、体部文様が磨消繩文とそれを区画する隆沈文によって構成される点で、隆線の一部に砲弾状の刺突が加わり、連鎖状隆線をなす。口縁は、いわゆる二重口縁を呈するものや橋状突起が見られる。青木畠遺跡では、隆線の始点や交点にボタン状貼付文を多用するが本遺跡では少い。又、隆線文も青木畠遺跡では、方形、渦巻、Y字状等の各種のモチーフが見られ、宝領遺跡より多彩である。これらは、宝領I群I、II類に対応するものであり、1群0類も含むものと見られる。青木畠Ic2、Ic2b類は、方形の繩文帶の区画文として、沈線間に連続刺突文がめぐるもので、宝領II群IIa、IIc類に対応するものである。青木畠体部資料dと分類された「重層して列をなす刺突文のもの」は、不確実な1例

を除くと、宝領遺跡では見られない。一方、本遺跡出土土器の主体を占める2群Ⅰ、Ⅲ、Ⅳ類や、3群Ⅰ～Ⅲ類土器は、青木畠遺跡では全く検出されていない。

以上の点から、青木畠遺跡出土縄文土器は、宝領遺跡1群0、Ⅰ、Ⅱ類及び2群Ⅱa、Ⅲc類土器—Aグループに、ほぼ限定された時間帯にあった事が知られる。

**青島貝塚** 登米郡南方町に所在し、宝領遺跡の南西約22kmに位地する。昭和44～45年、青島貝塚発掘調査団によって調査され、縄文前期から縄文後期にいたる時期の各種の遺物が出土している。青島貝塚からは、宝領1群0類、Ⅰb、Ⅰc、Ⅰd、Ⅱa類、2群Ⅰ、Ⅲa、Ⅲb、Ⅲf類、3群Ⅰ、Ⅱ類土器に対応するものが出土している。特に、1群Ⅰb～Ⅰd、2群Ⅰ、Ⅲa、Ⅲb類に対応するものが多い。宝領1群0類に対応するものは、第10類として大木10式に、他の1～3群に対応するものは、すべて青島貝塚の第11類土器に包抱され、宮戸1b式以前及び、宮戸1b式に夫々、位置づけられている。尚、第11類土器は、Cトレンチ2、3層、Dトレンチ2層から多出し、aとしたもの（第11類土器をa～eに細分しているが、不勉強の為、宝領遺跡出土土器と細部の比較はできなかった。ただし、a類が門前貝塚第2a類に比定されるという点からすれば、宝領1群Ⅰ類に比定されるグループと理解した）は、Cトレンチ3層からまとまって出土し、Cトレンチ2層からは出土していないと言う。この層位関係を重視すれば、宝領遺跡Aグループと、Bグループに先後関係が認められる事になる。

**貝鳥貝塚** 岩手県西磐井郡花泉町に所在し、宝領遺跡の西方約24kmの地点にある。本貝塚は、宮城県北潮沼貝塚群の一部をなし、その最奥部に位地する。昭和41年（第3次）、昭和44年度（第4次）の調査で、縄文中期から弥生中期にいたる多量の遺物が発見されている。その内、第Ⅱ群上器が後期前葉の土器群として区分されている。宝領遺跡出土土器との対応関係は、第1群Ⅰ類と第Ⅱ群第1類、第2群Ⅰ、Ⅲ類と第Ⅱ群第2類、第1群Ⅲ類、第3群Ⅰ、Ⅱ類と第Ⅱ群第3類、不確実ながら第2群Ⅳc類と第Ⅱ群第4類が、夫々対応すると考えられる。特に注目されるのは、宝領遺跡第2群Ⅰ類土器が貝鳥貝塚でかなりまとめて出土している点で、宝領遺跡AグループとBグループの関係に、示唆を与えるものであろう。

上記した3遺跡は、いずれも宝領遺跡A、Bグループを主体とし、C、Dグループは存在しないか、存在しても僅少である。このような傾向は、門前貝塚、八天遺跡等においても認められる。一方、宮城県南部の類例には、六反田、菅生田、向畑、二屋敷の各遺跡がある。菅生田遺跡第2群土器は口縁部に隆（沈）線文が多用される点、ボタン状貼付文等を有する点で宝領遺跡Aグループと同様の要素を有するが、隆（沈）線文のモチーフに（L）状下垂線文、三角形状文弧状文等が多用され、その交点、始点にボタン状貼付文；小輪がつくものが多く、宝領Aグループに特徴的な、連鎖状隆線文を有するものはない。変って菅生田遺跡では、隆線上に円形刺突、刻目等を施紋施文するものが多い。宝領遺跡B～Dグループに該当するものは、ほとんど

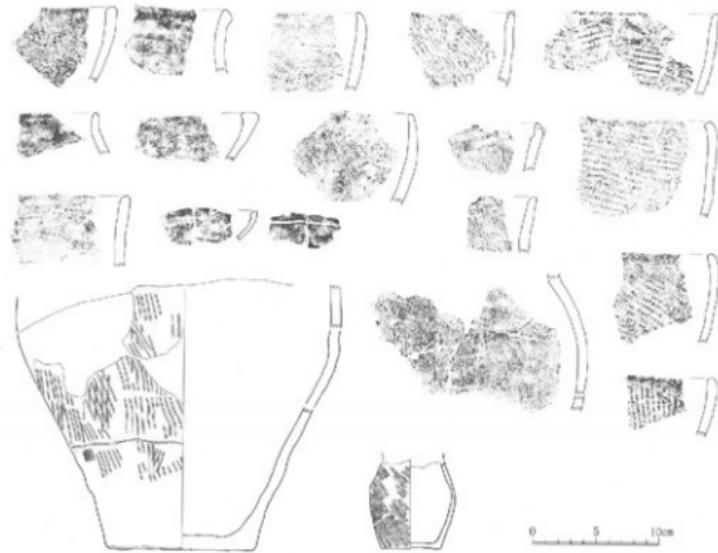


第31図 C、Dグループの土器他

見られない。どちらかと言えば、むしろ青木畠遺跡の資料に近似点が認められる。向畠遺跡資料は、菅生田第II群土器とほぼ、同じ内容を有する。(芳賀:1972、及び丹羽、阿部、小野寺:1982による)二屋敷遺跡については、その一部が白石市史等に掲載されている。それによると口縁部等の隆線文は少く、横位に展開するワラビ状、入組渦巻等の磨消繩文帯が盛行する。文様帯の始点、交点に盲孔、まれにボタン状貼付文がつけられる。宝領遺跡各グループの土器とは、文様の構成、モチーフ等の点で大きく相違する。但し、Bグループの土器の中にモチーフの類似するものがある。例えば、宝領1群Ⅲ類土器に顯著な、倒卵状と三角形状の磨消文帯が交互に配されるものに、(白石市史P410-4)の土器のモチーフが類似する。又、宝領1群Ⅰb類に該当するものがある(白石市史P409-5)。六反田遺跡の内容は、菅生田第2群土器に近似するが、一方では、宝領遺跡Aグループに該当するものや、二屋敷遺跡の土器に近似するものも含まれている。しかし、宝領遺跡B-Dグループに該当するものはほとんど見られない。金取遺跡では、宝領遺跡A、BグループとCグループに対応するものが相半して出土している。六反田遺跡とともに、宮城県中央部に位置する為の地域的特性を示すものと言えよう。

#### 4. いわゆる南境式土器との関係

記述が前後するが、宝領遺跡出土の後期繩文土器は、宮城県史34巻による限り、伊東信雄氏



第32図 其の他の土器

によって設定された南境式にすべて包抱される。東北南部の後期前葉の土器形式には、他に門前式(吉田:1957)、袖窓式(林:1967)、宮戸Ib式(後藤:1974)、網取I、II式(馬日:1970 1977)等が知られている。

ところで、いわゆる南境式土器を宮城県史34巻によって理解し、宝領遺跡の土器群に対比すると以下の如くなろう。

P70(1~3)の土器は、従来、門前式、袖窓式と呼ばれてきたもので、県北部の青木畠遺跡出土土器もこの仲間であろう。県南部の皆生II遺跡II群、向畠遺跡の土器群にほぼ併行するものであろう。両遺跡の土器群は、網取I式と極めて近似した様相を呈し、ともに関東地方の称名寺式土器を共存する事が知られている。宝領遺跡Aグループは、この仲間であろう。

P72(3・5)の土器は、後藤氏の南境A群2~6類土器や、貝鳥II群2類土器等に代表されるもので、後藤氏は宮戸Ib式に先行するタイプとしている。宝領遺跡Bグループの大部分もこの仲間と見てよい。

P71(1・2)、P72(1・2・4)の土器は、網取II式と直接的な関連を有し、これを模体として、関東地方の堀ノ内I式とも極めて近似した様相を呈する。後藤氏は、このグループを宮戸Ib式にされたい意向である。宝領遺跡Cグループは、ほぼ、この仲間と見られる。

P73(1・2・4・5)は、東北北半に分布の中心を持つ、大湯式、十腰内I(b)式に共通の要素を有し、関東地方の堀ノ内II式に併行するものと考えられている。宝領遺跡Dグループも、この仲間であろう。

以上のように、県史に見る南境式土器は、関東地方の称名寺式、堀ノ内I、II式の3形式にほぼ、併行関係を有し、前掲の東北南部の諸形式をすべて包抱し、更に東北北部の十腰内I式の一部をも組み込んでいる事が知られる。本稿では、宝領遺跡のグルーピングにあわせて、宮城県史に見る南境式を、文様構成、モチーフ、施文手法等の点から便宜的に4つにグルーピングしたが、宝領遺跡のグルーピングとほぼ対応するものと考えられる。但し、各グループ間の<sup>(註2)</sup>地域的、年代的な相関関係は、筆者自身、充分、理解していない。

以上の点を踏まえて、宝領遺跡の後期縄文土器について要約すると以下の如くなろう。

○大きく、A~Dの4つにグルーピングできる。

○Aグループは、本遺跡の後期縄文土器のなかで、最も古い土器群と考えられる。

○Bグループは、Aグループと密接な関連を有するが、Aグループよりやや後出の可能性が高い。Aグループとは、地文の使われ方にも相違が認められる。<sup>(註3)</sup>本遺跡では主体となるグループである。

○Cグループは、A、Bグループの土器群と比較すると、かなりの差異が指摘できる。又、出土層位、地点にも相異が認められる。宮城県南部の土器と共通する点が多い。

○ D グループは、1 個体のみで、東北北部の十櫻内 I 式に含抱されるものである。本遺跡では客体的な存在である。

○ 宝鏡遺跡の後期縄文土器は、広義のいわゆる南境式に含まれるもので、南境式を細分した場合、その前半期に位置づけられるものが主体となる。又、出土土器には、宮城県南部から福島県に分布の中心をもつ土器群、宮城県北部から宮城県南部にかけて分布の中心をもつ土器群、更に東北地方北部に分布の中心をもつ土器群等が共存するが、宮城県北部から岩手県南部にかけて分布の中心をもつ土器群が主体になるという、地域的特性を有する。

(註)

- 1) 文中、門前貝塚(Y)としたものは、吉田：1957文献、門前貝塚(O)としたものは、及川・遠藤他：1974 文献、南境貝塚(G)としたものは、後藤：1974文献の略である。
- 2) 宮城県に於ける後期初頭土器の地域性については、菅生田遺跡報告書中で考察され、宮城県南部と北部とでは、顕著な地域差が認められる事を指摘している。
- 3) 口縁部資料81点を検討した結果、次のような変化が認められた。A グループ=縄文：30、撫糸文：5、B グループ=縄文：17、撫糸文：26。

## V. 故三塚氏採集遺物

一迫町金田地区の考古学研究の第一人者であった三塚信一氏は、昭和56年夏、逝去された。生前、氏の採集された遺物は、逝去後、すべて一迫町教育委員会に寄贈された。この寄贈資料の中に、宝鏡遺跡に関する資料が含まれていたので、簡単に紹介する。図版21-1~18。

尚、(1~16) の資料は、昭和52年冬に行われた川北地区の県立公園整備事業の際、採集されたもので、採集地点は、今回発掘地点の北方約 100 m の地点で、宝鏡遺跡の北端部にあたると思われる。これを、便宜的に B 地区とする。(17~18) には竹の花遺跡とネーミングされている。竹の花遺跡は、C レンチ11区の東方約 130 m の地点であり、宝鏡遺跡と区別してきた。

(1)、頸部から口縁にかけて強く外反し、口縁は大ぶりな波状口縁をなす。口縁と頸部の境は外面では段、内面では隆線文によって区画される。波状口縁頂点下に円文、孤文が沈線によって描れる。頸部は布広の無文帶となり、体部には磨消縄文が見られる。(3~5) は、口縁が肥厚又は隆線をもつもの、いずれも波状口縁をなす。

(2~5~16) は、地文と沈線文によって文様が描れるもの。(2) は、波状口縁を呈し、頸部に重孤文、横位直線文等による文様帶があり、以下に縱位の撫糸文が施文される。(5~8) は、いずれも口縁部で、沈線文が施文される。(9) は、横位の撫糸文を地文とし、4 条前後の太い沈線による直線、曲線文が描れる。沈線部分は磨消される。(11, 12, 14) は、斜位の撫糸文を地文

とし、縦方向の直線文が見られる。一方、磨消手法がとられているが徹底されていない。⑭は口縁部に沈溝と円文による狭い模様帶を持ち、体部に3条単位の沈線による縦方向の直線文と波状文が交互に描かれる。器形は、体部から口縁にかけて直線的に外傾する深鉢である。⑮は体部中位まで縄文と沈線文による文様帶があり、以下は無文である。

⑯は、2個連続する小突起を有し、口唇部には竹管円文が連続してつけられる。体部には、沈線により方形区画文が描かれ、その交点に竹管円文が配される。突起頂点下に貫通孔がうがたれる。⑰は、体部から口縁にかけて外反するもので、隆線と沈線によって方形に区画され、内部に縄文が見られる。隆線上部に、2ヶ組の横位の刻みがつけられる。

以上紹介した故三塚氏採集遺物は、その特徴から見て(17・18)を除くそのほとんどは、縄文後期前葉に属するものと見て良い。そこで、今回の発掘資料と比較すると、その大部分の土器とかなりの差異が指摘できる。①地文が燃糸文に限定される。②狭い口縁部文様帶が存在する。③文様は、3～4条の平行線によって、直線文、弧文等が描かれる、等の点である。②③の特徴を有するものは、今回の発掘資料に対比するとⅡ群、Ⅲ群土器、すなわちCグループに含まれる。前述したように、Cグループの土器は、出土量も少なく、しかもその出土はBトレンチ2～4区やCトレンチ2区にはば限定される。

⑯に類似する資料は、南境貝塚出土土器で沈線の交点に竹管円文を配置するものがあり、近縁のものであろう(後藤：1974、第7図3)。⑰は、沼津貝塚出土土器(三塚、阿部、佐藤：1976第17図版2)に近似し、大木10式に含まれている。宝領遺跡1群0類に近似する。

## VII. ま　と　め

1. 宝領遺跡は、一迫町北岸の河岸段丘上に立地する。
2. 宝領遺跡は、発見された遺物から見て、縄文時代（前期・後期）平安時代の複合遺跡である。その大部分は、縄文後期前葉に属するものである。
3. 今次調査で発見された遺構は、近～現代に構築された集石を伴う溝1条と、土塹1基である。土塹の年代は、掘り込まれた地層、出土遺物から見て縄文後期前葉に属すると思われる。
4. 調査によって出土した遺物には、縄文土器、土器片利用円盤、各種石器、平安時代の土器等がある。
5. 縄文土器の大部分は、後期前葉のいわゆる南境式に包抱されるが、土器文様、施文技法の特徴等から大きく、4つにグルーピングした。各グループは、夫々、年代的、地域的な相違を示すものと見て良い。
6. 縄文後期土器は、同時期の宮城県北西部の地域的特性を知る上で、貴重な資料である。
7. 出土石器の大部分も、縄文後期前葉の土器に伴うものと考えられ、同時期の石器組成を知る上で貴重である。
8. 今次調査区は、遺跡の南縁部にあたり、調査区の北側に遺跡が更に延びている事が確認されている。

## 引用・参考文献

- 一條季大 (1978) 潟坪遺跡発掘調査概報「宮城県文化財調査報告書」第54集 P1~33
- 伊東信雄 (1970) 宮城県一迫町山王遺跡「日本考古学年報」18
- 伊東信雄他 (1981) 繩文土器、櫛文時代 「宮城県史」34 P67~73、P379~381
- 今井・磯崎 (1969) 「十腰内」十腰内遺跡調査団 P316~388、PL 58~82
- 今村啓樹 (1977) 称名寺式土器の研究(上)(下)「考古学雑誌」63巻1、2号 P1~29、P22~60
- 及川・小野寺・達藤 (1972) 「堂ノ前貝塚」P1~34
- 及川・遠藤他 (1974) 「門前貝塚」 P1~57
- 小野寺祥一郎 (1980) 金取遺跡「宮城県文化財調査報告書」第70集 P1~49、図版1~9
- 加藤・後藤 (1975) 登米郡南方町青島貝塚発掘調査報告「南方町史、資料篇」P1~274
- 加藤道男 (1982) 青木畠遺跡「宮城県文化財調査報告書」第85集 P1~84
- 片倉・中橋・後藤 (1976) 考古資料篇「白石市史、別巻」P1~617
- 明治流高社会社 (1968) 「木古内郡桑町藤原遺跡、古館貝塚発掘調査報告」P1~20
- 金子・和田 (1968) 納取C地点貝塚の発掘「小名浜」P79~126
- 狩野・真山 (1982) 岩手空谷遺跡「宮城県文化財調査報告書」第86集 P31~78
- 狩野義章 (1959) 「栗原郡花山村原井田遺跡調査報告」
- 狩野義章 (1974) 一迫町鶴巣団と柳屋敷団の調査「栗原郷土研究」第6号 P12~18
- 興野義一 (1970-a) 大木5b式土器の提唱 一宮城県長者原遺跡出土資料による—「古代文化」22卷4号 図版第六~第十、P97~102
- 興野義一 (1970-b) 大木式土器理解のために(V)「考古学ジャーナル」第48号 P20~22
- 興野義一 (1976) 一迫町の考古学「一迫町史」P45~100
- 草間・金子(編) (1971) 「貝島貝塚」P1~285、図版1~94
- 草間俊一(編) (1974) 「崎山弁天遺跡」P1~168 図版1~41
- 後藤勝彦 (1974) 繩文後期宮5b式周辺の吟味「東北の考古、歴史論集」P79~110
- 後藤勝彦 (1981) 繩文後期の土器 一東北地方 「繩文土器大成」3巻 P139~143
- 楠本政助 (1973) 第一編 先史 「矢本町史」第一巻 P47~264
- 金野・佐藤 (1976) 宮城県栗原地方の原始、古代の文化「栗原町史」別刷 P127~284
- 佐藤・吉岡他 (1981) 山口遺跡発掘調査報告書「仙台市文化財調査報告書」第33集 P1~254 図版1~48
- 佐藤信行 (1977) 一迫町宝領遺跡発掘調査概報「栗原郷土研究」第9号 P19~22、第1~2図
- 佐藤信行他 (1978) 上ノ原A遺跡「一迫町文化財調査報告書」第3集 P1~84
- 佐藤信行 (1980-1) 東北南部における縄文晩期終末とその直後の文化(上)(下)「考古風土記」第5、6号 P97~112、P18~43
- 鈴木克彦 (1981) 瓢箪型コレクション: 岩偶、舟型土器製品、土器片利用の円板「青森県立郷土館調査研究年報」No.7 P47~64
- 須藤隆 (1973) 土器組成論「考古学研究」19巻4号 P62~89
- 須藤隆 (1983) 東北地方の初期弥生土器 一山正昌著式 一「考古学雑誌」68巻3号 P1~53

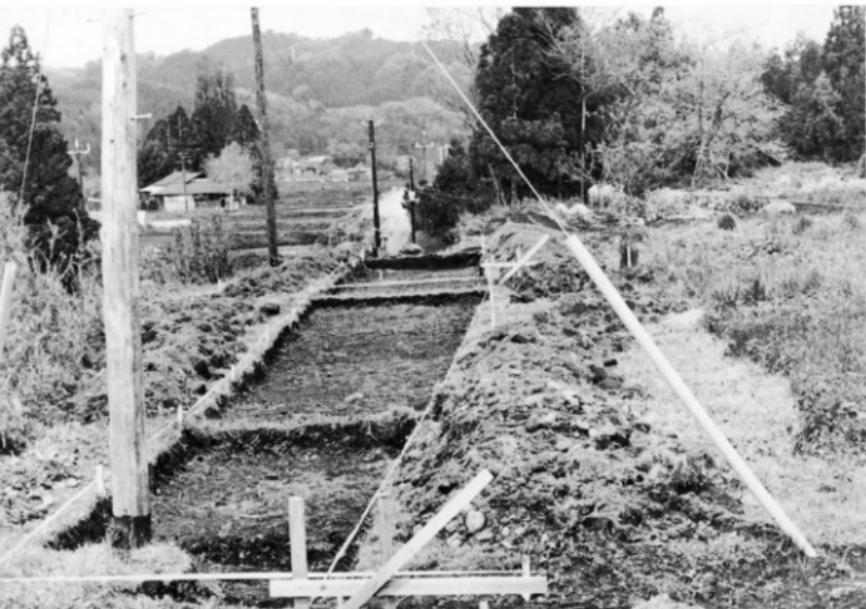
- 高橋・小出野・熊谷 (1982) 「岩手の土器」 P19、87~92
- 田中 開和 他 (1981) 六反田遺跡「仙台市文化財調査報告書」第34集 P1~624
- 中村 良幸 (1979) 立石遺跡「大迫町埋蔵文化財報告」第3集 P1~388
- 成田 謙彦 (1981) 3. 後期の土器—青森県の土器—「縄文文化の研究」4巻 P123~132
- 丹羽・河部・小野寺 (1982) 菅生山遺跡「宮城県文化財調査報告書」第92集 P23~300
- 芳賀 寿幸 (1972) 向畠遺跡調査概報「柴田町郷土研究会報」7号 P8~20
- 林 勝作 (1967) 縄文文化の発展と地域性—東北—「日本の考古学」II P64~96
- 林・藤沼 (1971) 二加敷遺跡「宮城県文化財調査報告書」第24集 P29~42
- 本堂 寿一 他 (1978~9) 八天遺跡 図版篇、本文篇「北上市文化財調査報告書」第24、27集、P1~205、P1~205
- 町田 信 (1973) 土器片利用の土板「考古学ジャーナル」No78 P18~23
- 馬目順一 (1968) 調取貝塚第四地点発見の概況内Ⅰ式期土器の考察「小名浜」P127~156、写真26~33
- 馬目順一 (1970) いわき市下片寄貝塚発見の後期縄文土器について「考古」第16号 P1~6
- 馬目順一 (1977) いわゆる「調取貝塚C1地K」の土器について「考古」第19号 P35~46
- 馬目・山田 (1981) 上ノ町B遺跡「南奥考古学研究叢刊」第三冊 P1~52、図版1~44
- 三塚・阿部・佐藤 (1976) 沼津貝塚の考古学的調査「沼津貝塚保存管理策定事業報告書」P8~60
- 宮田毅(編) (1977) 英城県吹上遺跡「大洗町文化財調査報告書」第6集 P1~84、図版1~33
- 宮城県文化財保護課(編) (1977) 「春紀遺跡」P1~32
- 宮城県文化財保護課(編) (1981) 宮城県遺跡地名表「宮城県文化財調査報告書」第73集 P445~450
- 青田義昭 (1957) 「門前貝塚」P1~31
- 渡辺誠 (1973) 縄文時代の漁業「考古学選書」7 図1~10、P1~248
- 八幡・開根他 (1973) 岩の花貝塚「松戸市文化財調査報告書」第4集 P1~587、図版1~161
- 氏家和典 (1957) 東北土器の型式分類とその編年「歴史」第14輯 P1~14
- 上嶋山武 (1980) 安久東遺跡「宮城県文化財調査報告書」第72集 P3~111

## 図 版

（図版中、土器の配列において、各遺構、地点毎に区別した）  
が、第一土器と第二土器に一部混同がある。  
遺物のスケールは不同である。）



図版 I 遺跡遠景、発掘前の状況



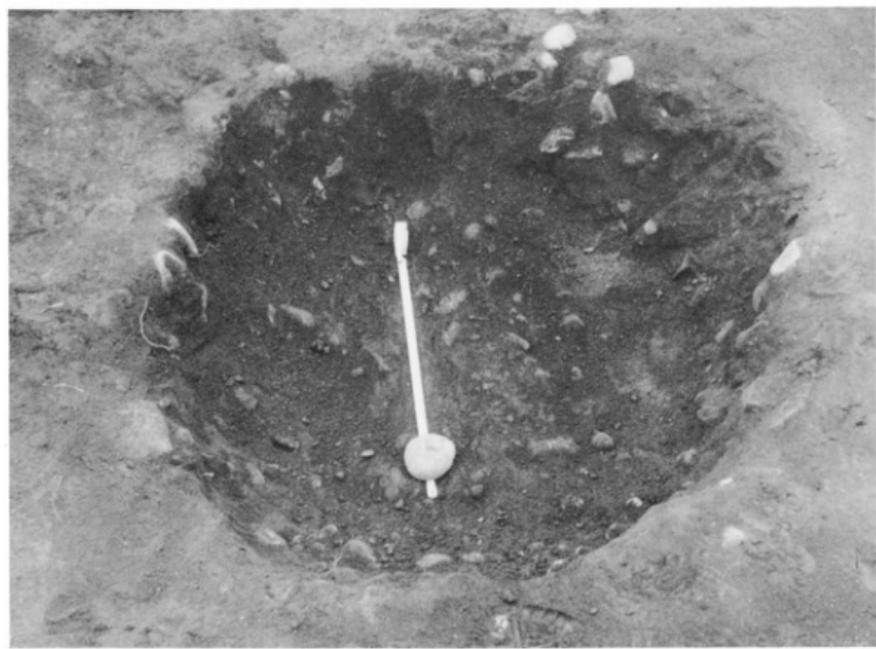
図版2 発掘状況  
(上:Aトレンチ)  
(下:Cトレンチ)



図版3 発掘状況、遺物出土状況(Bトレンチ)



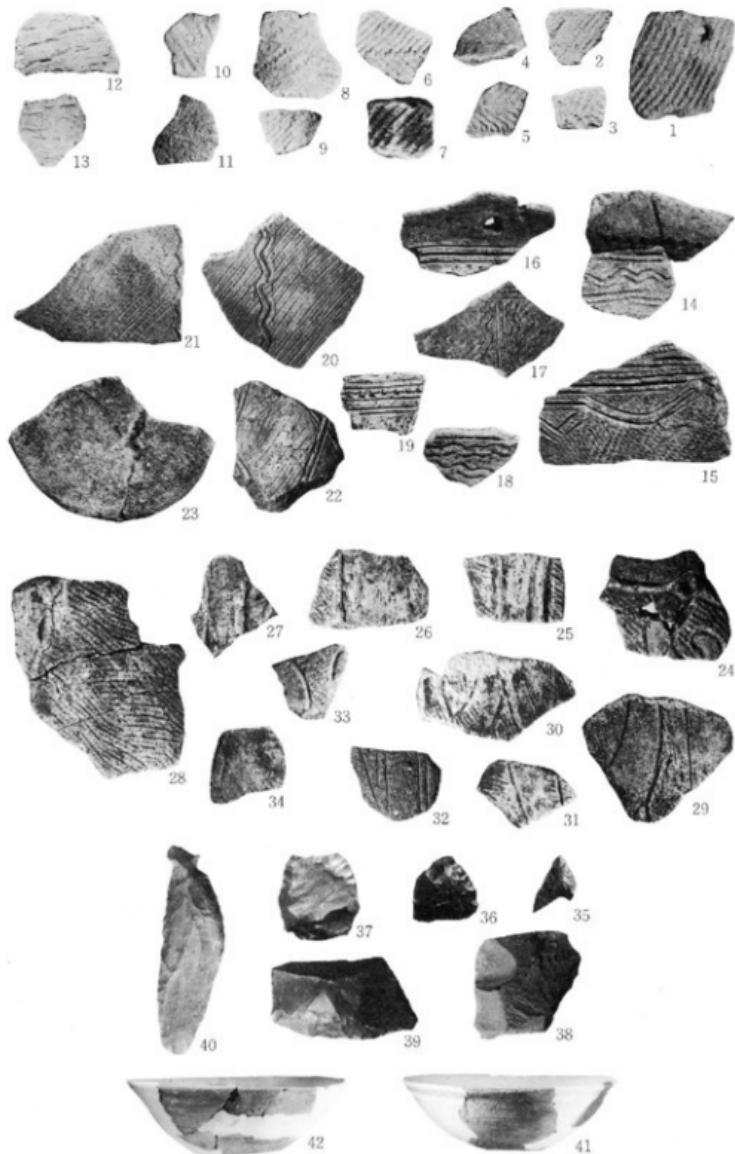
図版 4 遺物出土状況(Bトレンチ)



図版5 土 塚



図版6 集石を伴う溝（近～現代）

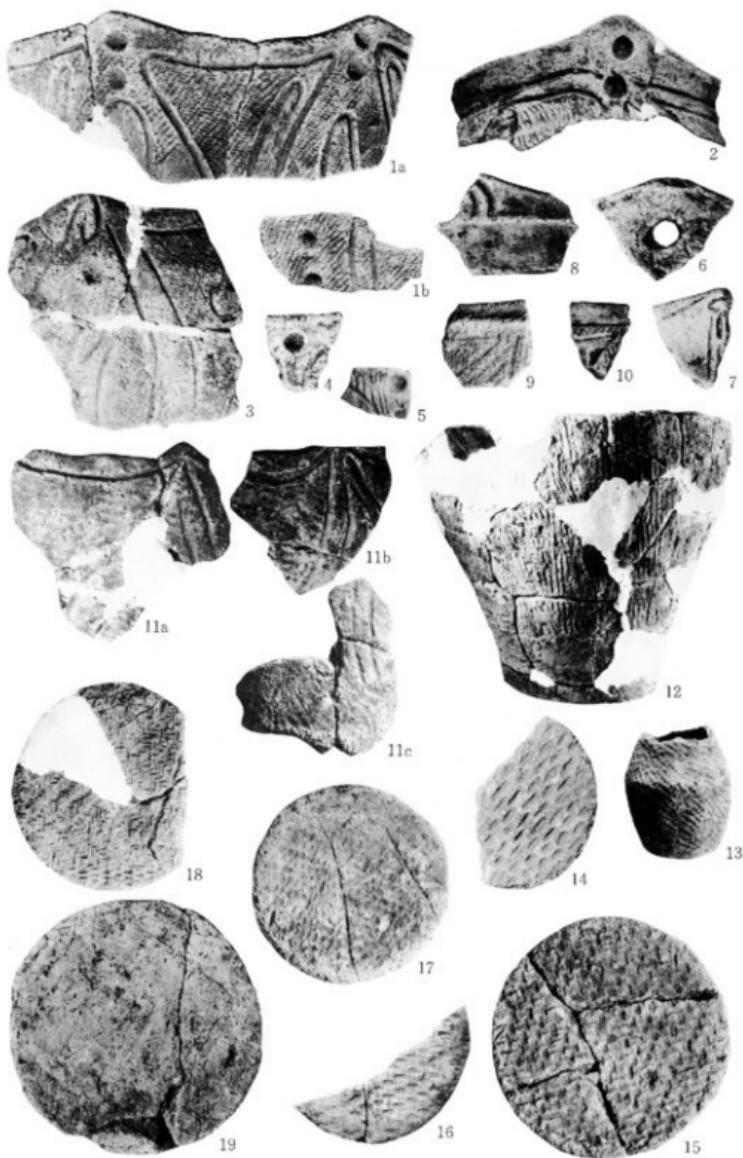


1~23:縄文前期土器、24~40:土埴出土遺物、41、42:赤燒土器

図版7 縄文前期土器他



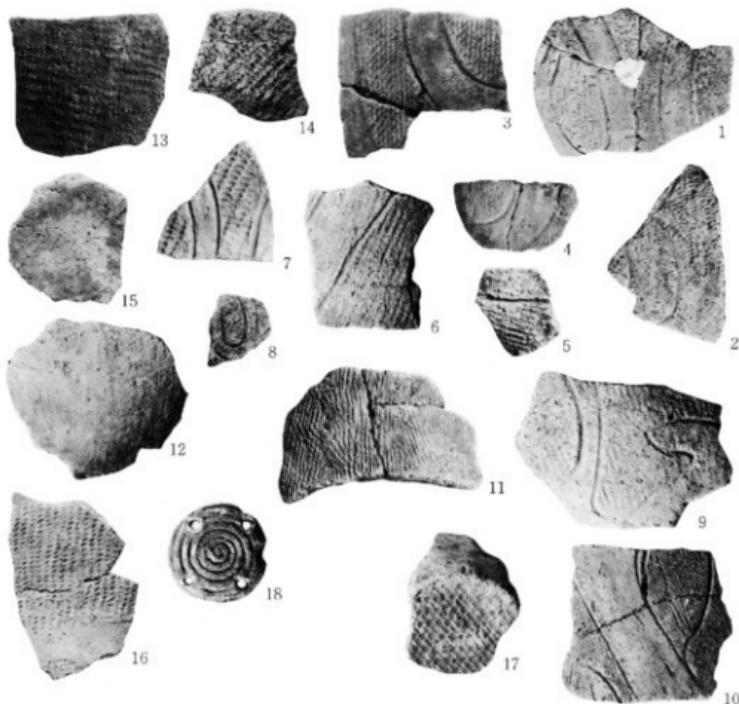
図版 8 繩文後期 第一土器



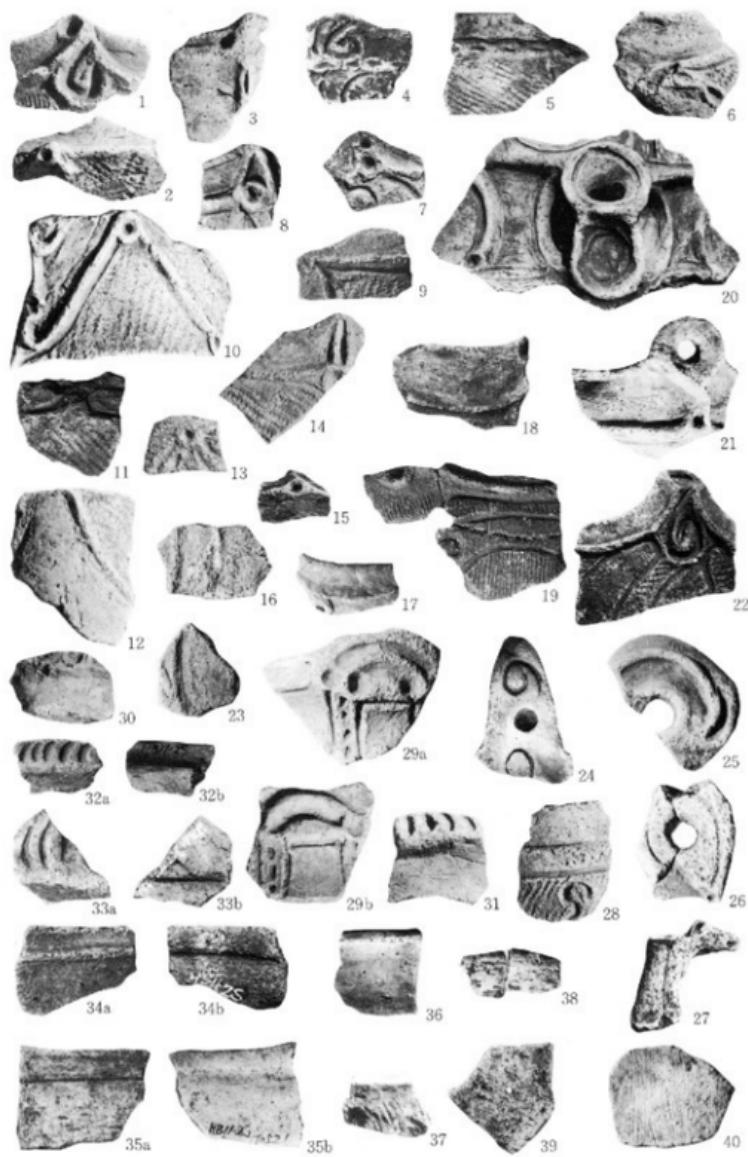
図版 9 繩文後期 第一土器



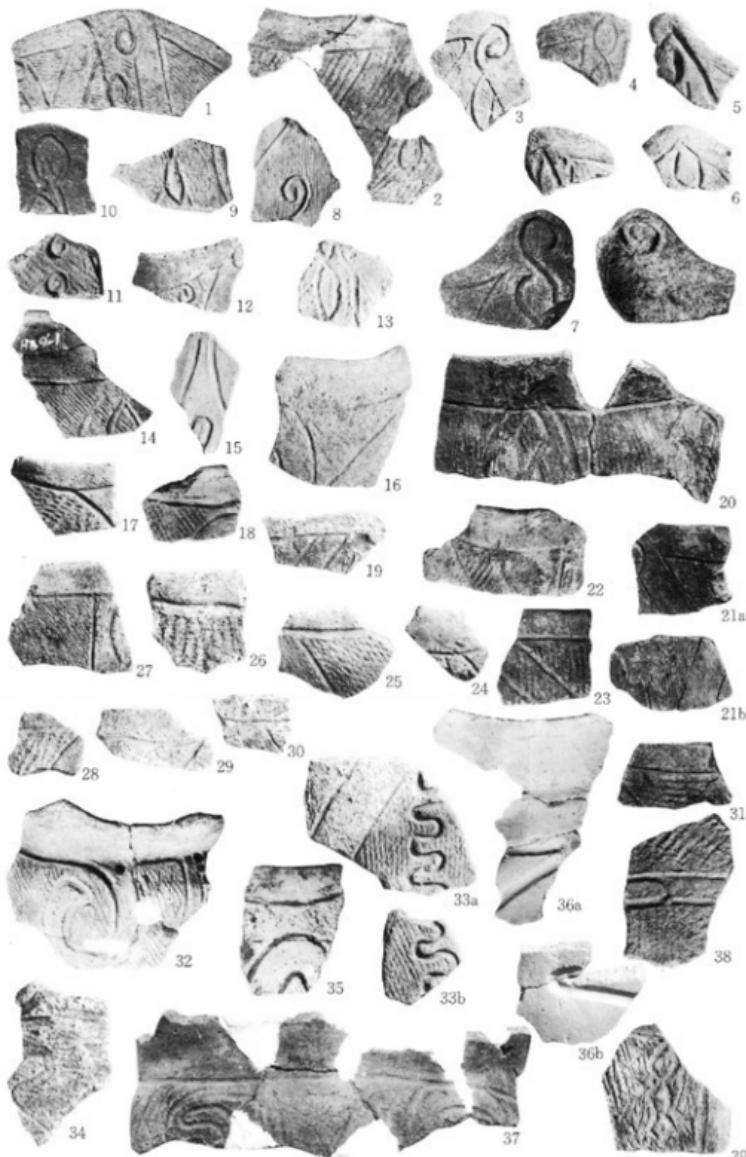
図版10 繩文後期 第一土器



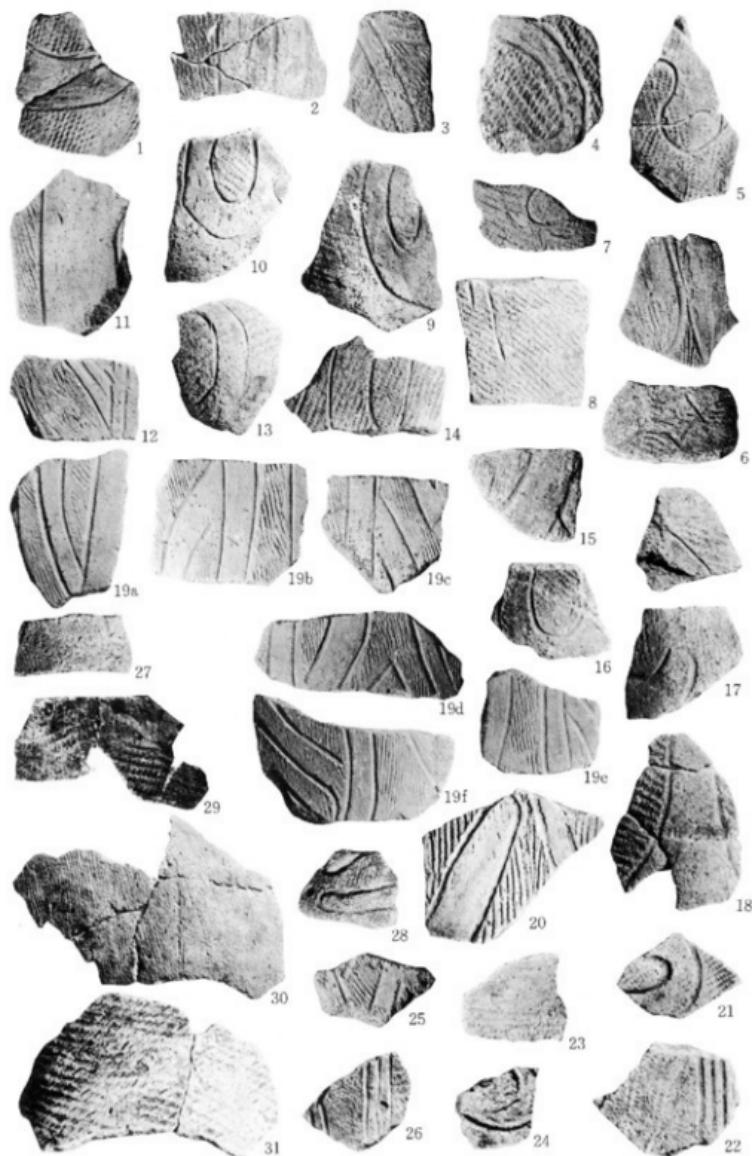
図版II 繩文後期 第一土器



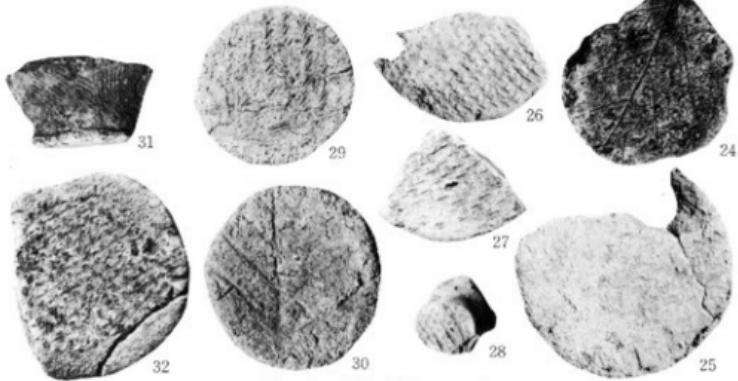
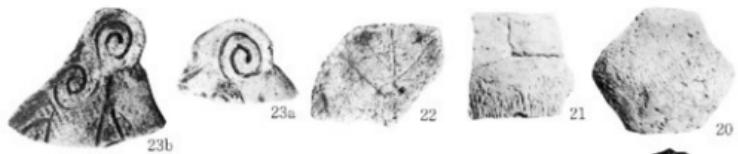
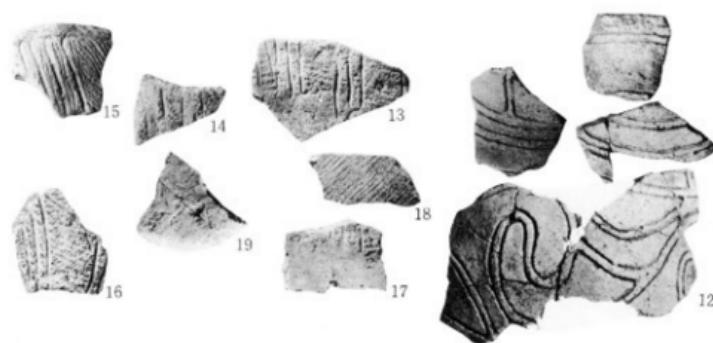
図版12 繩文後期 第二土器



図版13 繩文後期 第二土器



図版14 繩文後期 第二土器

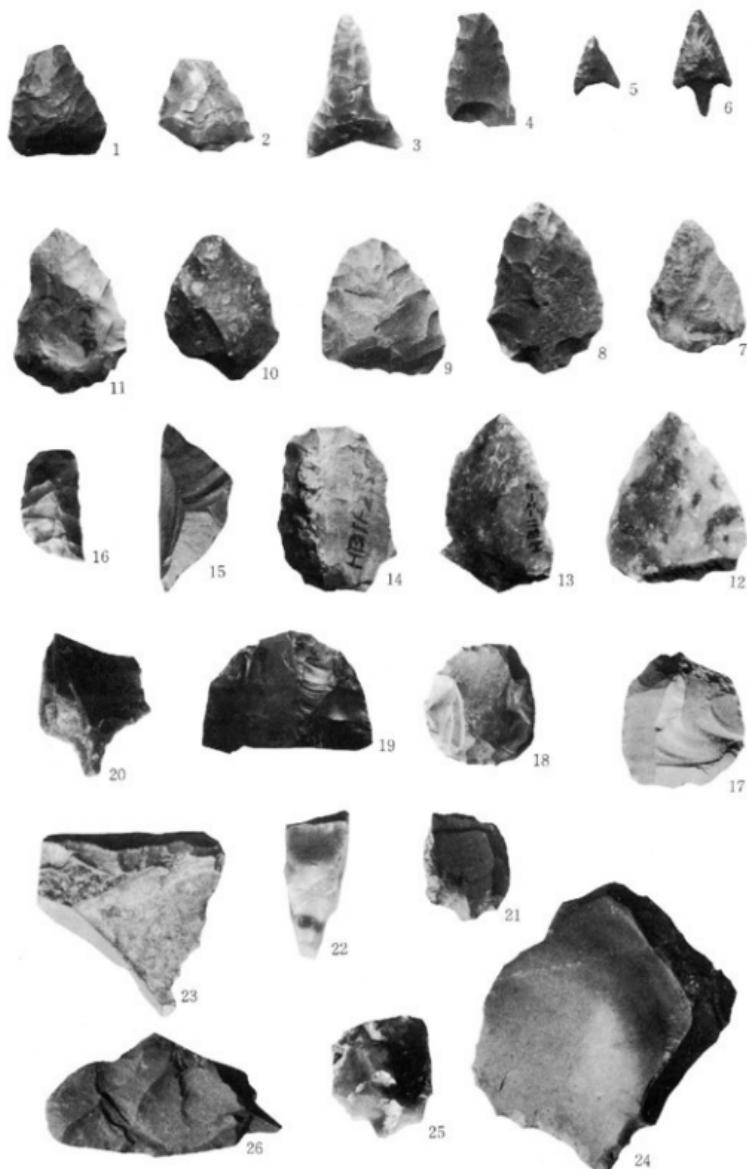


上段：第三土器、下段：その他

図版15 繩文後期 第三土器他



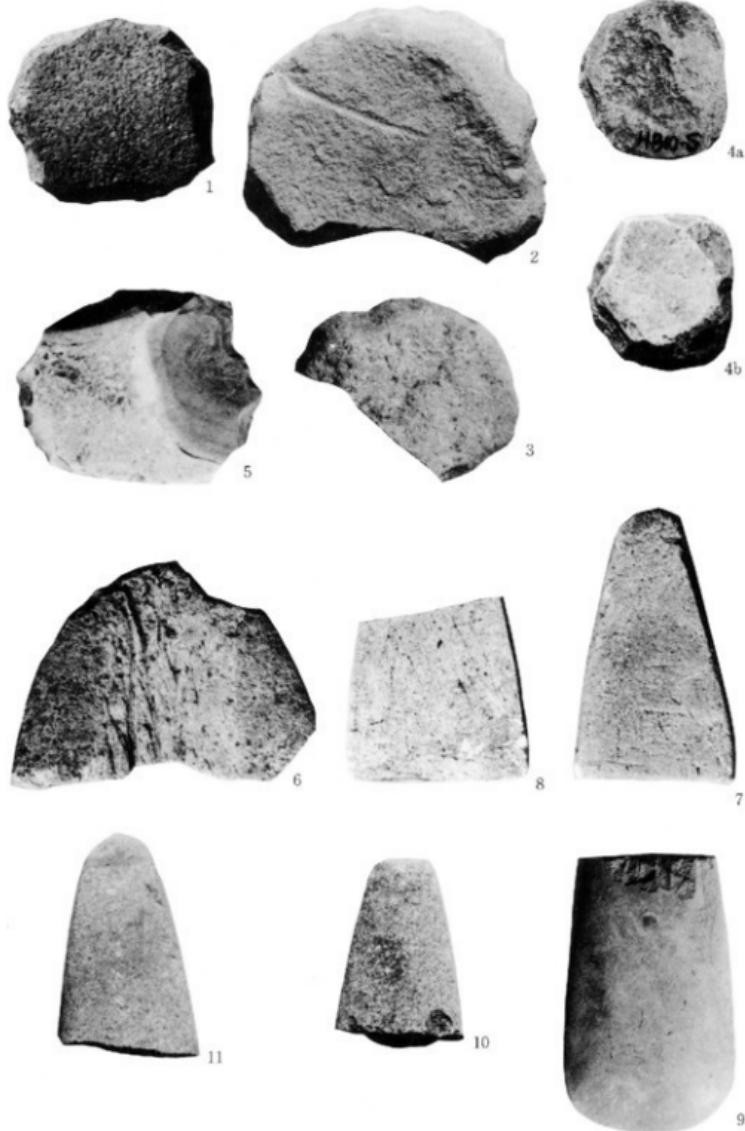
図版16 土器片利用円盤



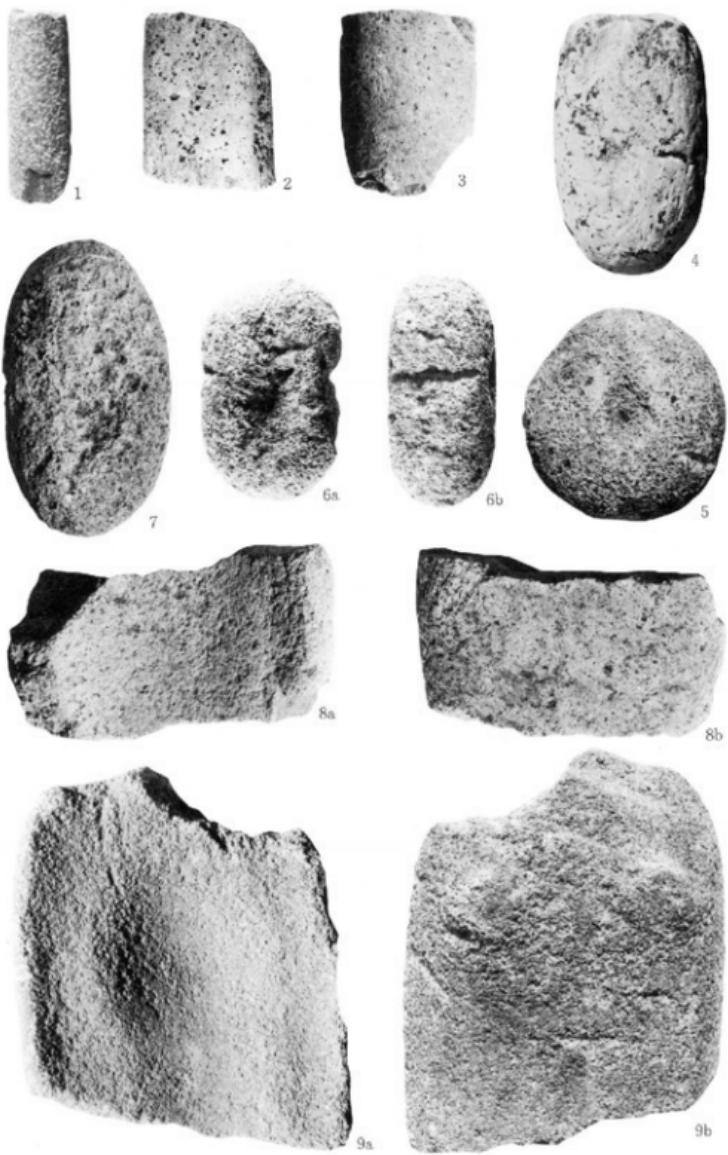
图版17 剥片石器 I



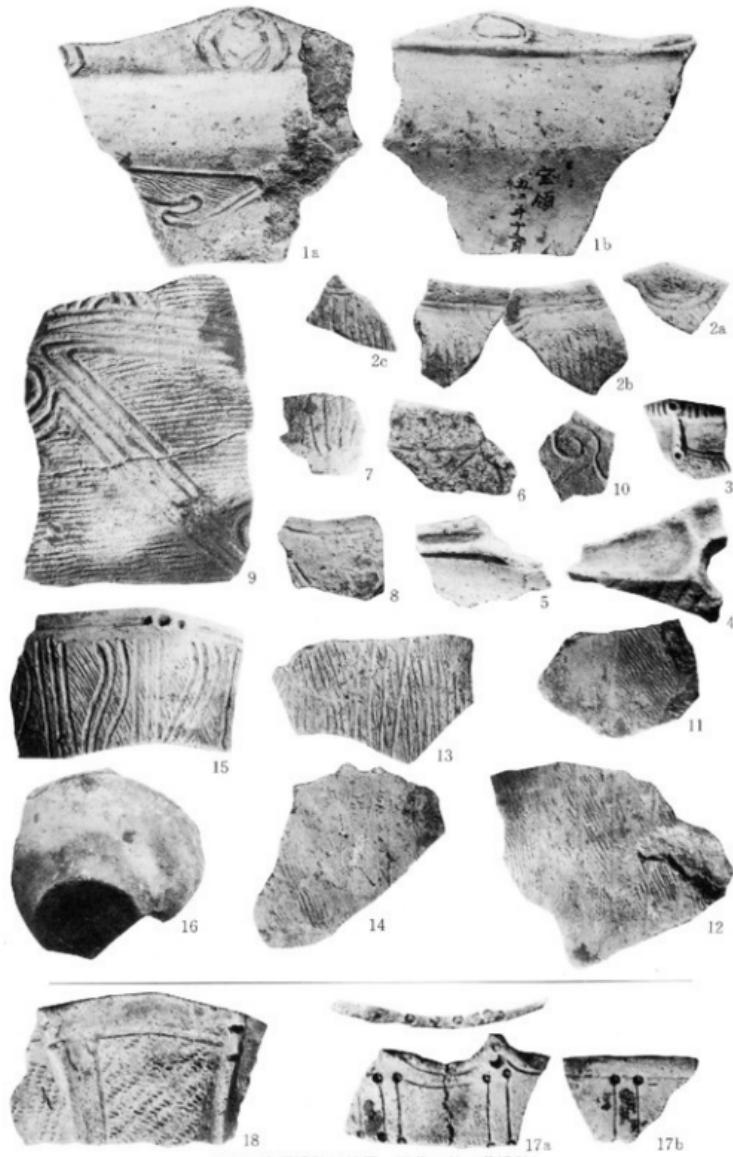
図版18 刺片石器 II



図版19 円盤状石器、磨製石斧他



図版20 凹石、石皿他



上段：宝领遺跡 B 地区、下段：竹ノ花遺跡

圖版21 故 三塚氏採集土器

## 一迫町文化財関係出版物

『史跡山王廻遺跡保存管理計画書』：1976年3月 P 1～20

『巻廻遺跡』：1977年3月 P 1～32

『宮城県一迫町文化財調査報告書』第3集「上ノ原A遺跡」：1978年3月 P 1～84

『宮城県一迫町文化財調査報告書』第4集「宝領遺跡」：1984年3月 P 1～93

---

### 宮城県一迫町文化財調査報告書 第4集

#### 宝領遺跡

昭和59年3月25日 印刷

昭和59年3月28日 発行

発行 一迫町教育委員会

〒987-23 宮城県栗原郡一迫町首坂字田川前5

T E L 02285-2-2111

印刷 南部屋印刷株式会社

〒987-22 宮城県栗原郡栗原町高田1-丁目7-36

T E L 02282-2-2131

---

